NUEVA

ヌエバでチャンピオンを目指せ!!


国際ハンドボール連盟公認球

日本リーグ唯一の公式試合球



日本ハンドボール協会検定球



国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球
32H300W　ヌエバ
●手縫い●天然皮革●３号球●32枚パネル

国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球
32H200W　ヌエバ
●手縫い●天然皮革●２号球●32枚パネル

molten®
株式会社 モルテン
東京本社　〒130-0003東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・広島・福岡・四国・仙台・札幌・リノUSA・デュッセルドルフG

巻頭言

歴史を継ぎ、これからの課題



全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部委員長　佐藤喜一

昭和25年に全国高等学校体育連盟にハンドボール専門部が設置されて以来、平成11年で創設50周年を迎えました。昨年8月の盛岡インターハイでは記念すべき50周年記念祝賀会を多くの関係者を迎え、盛大に挙行することができました。

この半世紀の間、諸先輩の部会へ対する熱い情熱と汗と犠牲、そして深い愛情に支えられ幾多の難関を乗り越えながら普及発展してきました。

さて、先人の残されてきた貴重な足跡と歴史を継承しながら21世紀に向け高校分野が担う役割を考えるとき未来は決して明るいとばかりは言えません。全国的な現場の実態として、生徒の少子化に伴う部員不足、これに伴う休部・廃部、部活動への生徒の考え方の変化、運動する者としない者との二極化によるスポーツ離れ現象、教員の新規採用の減少による指導者不足、指導者の高齢化による勝敗に対するこだわりの喪失など、諸問題が今後急速に教育現場へ押し寄せてくることが危惧されます。特にこれから先、全国で毎年約100チームの登録減少が予想されます。当面、このような状況を打破するため、各高校において少ない部員で如何に維持運営していただくか、指導者の力に頼らなければなりません。皆様には、今一度奮起をお願いし、ハンドボール競技の、高等学校の部活動の活性化にご協力くださるようお願いいたします。

なお、専門部としては選抜大会の適正規模、審判員の育成、競技運営等の課題解決を模索しながら、競技者の底辺拡大など早急に取り組まなければなりません。併せて、少子化に伴う部員の登録減少の歯止めを目指し、魅力あるハンドボールを作り上げ、国際化の進む昨今世界に通用する高校生の強化をし、中高校連携を密にしての競技力の向上が必要です。

高体連は、21世紀を目の前にして、選手や後輩の指導、育成に情熱を傾けると同時に、高校ハンドボール界の発展に寄与しなければなりません。次代を担う高校生の大きな夢とロマンを求める若者を育て『歴史を継ぐバトン』となれるよう微力ながら専門部としては鋭意努力していきたいと思います。ご支援、ご協力をお願いいたします。

（本号14、15頁に各都道府県高体連の状況、課題をまとめた記事を掲載いたします。）

男子第9回・女子第7回 アジア選手権兼シドニーオリンピックアジア予選

男女とも、大韓民国が優勝し、シドニー代表に

男子第9回・女子第7回アジア選手権兼シドニーオリンピックアジア予選は、男子が1月25日(火)より30日(日)まで、熊本市総合体育館と松橋町総合体育文化センターの両会場で、女子が1月24日(月)から29日(土)まで山鹿市総合体育館で開催された。

男子は、韓国、日本、中国、チャイニーズタイペイ、イランの4カ国1地域の参加で開催された。大会の展開は、韓国が圧倒的な強さを見せ、日本戦以外は大差で勝ち進んだ。結果は4戦全勝でアジアチャンピオンの座とシドニーオリンピックのアジア代表の座を勝ち取った。

日本ナショナルチームは、韓国戦には善戦したものの、途中の山場となる中国戦を後半の拙攻から逆転を許し、先の世界選手権予選に引き続きの敗戦を喫した。この一戦が響き、結局3位にとどまった。

イランチームは、18歳から21歳のメンバーでこの大会に臨んだが、他の4チームとは力の差が歴然としていた。

女子は、韓国、中国、日本、朝鮮民主主義人民共和国、チャイニーズタイペイの4カ国と一地域の参加で行われた。大会の展開は韓国が、世界選手権での不調を伝えられ、もつれると思わせたが、やはり世界の上位の実績を持つ強みを見せ、4戦全勝で男子と同様シドニーオリンピックアジア代表の座を勝ち取った。

日本ナショナルチームは、世界選手権からの好調を伝えられ、緒戦のチャイニーズタイペイ戦を31ー7の快勝で、次の韓国戦に期待を持たせた。韓国戦では前半13ー15の2点差で折り返し後半に期待を持たせたが、後半動きが止まり、結局20ー30での敗戦となった。大会4日目には、日本ナショナルチームは朝鮮民主主義人民共和国と対戦し辛くも1点差で勝ちを収めるが、韓国が3勝目をあげたため日本の2位以下が最終日を待たずに決定した。大会5日目には、2位の座を賭け中国と対戦したが、1点差で惜敗し3位が確定した。最終日は、チャンピオンの座をかけ韓国・中国が行われたが、韓国が貫禄を見せ、31ー29でシドニーオリンピックアジア代表の座も勝ち取った。

この大会通算で、田中美音子選手がゴール数31点で最多得点を挙げたことは喜ばしい記録となった。

(本文中に用いた写真は全てフロムワン提供)

男子

韓国 37 (18ー4 / 19ー8) 12 台北

韓国20番ペクのカットインで始まったこの試合、前半韓国19番チョウのロング、14番パクのポスト、15番チェ、10番リムのサイドと華麗なシュートを見せ、着実に得点を重ねて行った。対して台北は韓国のディフェンスを崩せず苦戦。タイムアウト後の積極的なディフェンスからの速攻を中心に反撃するが韓国16番キーパー、リーの好守に阻まれ、力を出し切れぬまま前半を折り返す。後半も韓国のディフェンスが崩せず、苦戦する台北に対し、着実なディフェンスからの速攻を次々ときめ、点差をひらく韓国は、後半10分には主力をベンチに下げるゆとりを見せ、危なげなく初戦の勝利をつかんだ。

中国 34 (18ー8 / 16ー10) 18 イラン

遅攻からの点の取り合いになった前半の立ち上がり、先に作戦タイムを取った中国が、2番ワンピン(2)のロング、10番チューウェンシンのサイドシュートに速攻を絡め、15分には3点差とした。その後、一進一退の攻防が続く中、小柄ながら切れのいいフェイントからテクニカルなサイドシュートが光る10番チューウェンシンの活躍など攻撃力で一歩勝る中国が、じわじわと差をひろげ前半を10点差で終わった。後半、中国は前半終了間際からしいている積極的なディフェンスからの速攻と2番ワンピン(2)、13番ワンシントン、9番チャンチーのロングで得点を重ねた。イラン



も、後半10分過ぎには下がり気味になった中国のディフェンスを積極的に揺さぶり得点を加えたが、差は縮まらず、ゲーム終了のホイッスルを聞いた。

韓国 38 (17ー8 / 21ー6) 14 イラン



韓国の3－2－1ディフェンスを、ポストを絡めた攻撃と速攻で前半7分まで互角に戦ったイランが、その後のセットオフェンスの乱れから連続3本の速攻をきめられ苦しい展開となった。その後、韓国は、シュートミスが重なったものの、見事なパスコントロールでイランを翻弄し、じわじわと得点差をひらき、後半24分にはディフェンスを6－0に変え、その後の失点を2点に抑え前半を折り返した。後半に入り、イランは韓国の堅い守りを崩すことができず、次々と速攻を許す結果となり、一方的な展開となった。韓国は後半10分に左のエース8番ユン・キョンシン、14番パク・ジョンシンを下げるゆとりを見せ、後半も5点の失点に抑えて、この日の試合を終わった。

日　本　24（10－9 / 14－9）18　台　北

立ち上がり、日本はディフェンスで厳しいチェックを見せる中、前半4分40秒、8番岩本の7ｍスローが初得点となり、その後はディフェンスからの速攻で、連続追加点とした。台北の積極的なディフェンスと13番タンのロングシュートに苦しみながらも7番中山を中心とした展開で、前半を1点リードで折り返した。後半、緊迫した試合の続く中、12分日本のタイムアウトの後、サイドを生かす広い攻撃で4点差とした。その後台北は日本の堅い守りに苦しみ、得点差が縮まらないまま試合終了となった。

中　国　24（9－11 / 15－9）20　日　本

日本は5－1ディフェンス、中国は3－2－1ディフェンスシステムを選択した。20分過ぎに日本ＧＫ橋本が7ｍスローを阻むと、リズムを取り戻し、9番田中、18番山口が速攻を決め、終了間際には、冨本が絶妙のステップシュートをきめ、2点差で折り返した。後半、中国は中山、冨本にマンツーマンにつき、徹底的なアタックディフェンスに出た。日本は攻め手を欠き、中国の速攻を許し、15分までに7連取され、主導権を完全に奪われる展開となった。15分過ぎからは、相手マークをはずし、何とか4点差までに詰め寄り、橋本も好セーブを連発したが、中国ワン・シントン、チャン・チーに強烈なロングシュートを決められ、突き放された。

台　北　27（12－5 / 15－13）18　イラン

登録メンバーのトラブルで、予定より遅れて始まったこの試合。台北は、13番タンに対するマンツーディフェンス、7番チョンの失格と、立ち上がりが心配されたが、イランのセンター攻撃をよく防ぎ、次々と速攻に結びつけた。前半16分には、積極的にカットを狙うディフェンスで大差になるかと思われたが、イランのキーパー、パルバネツが再三の好守を見せ、後半に折り返した。後半、得点が動き出したのは10分過ぎ。台北は、下がり気味のイランディフェンスに対し、センターからのミドルシュートがよくきまり、じわじわと離していった。イランも、粘りのある攻撃で食い下がるが、点差は縮まらず、最終的には、速攻で一歩秀でた台北が勝利を手にした。

韓　国　32（16－3 / 16－13）16　中　国

韓国20番ベクのすばらしいボディーコントロールからくりだすシュートで始まったこの試合、ポストとのコンビネーションでうまくディフェンスを振り切ろうとする中国に対し、10分過ぎには完全に抑えて、速攻の連続となり点差はひらいた。後半に入り、ゆとりの出た韓国が、視野の広いパス回しで、ノーマークにしてシュートする場面が増えていく中、中国も、ディフェンスに甘さの出た韓国に対し、思い切って切り込む攻撃を見せ、一時はシーソーゲームとなった。後半13分、作戦タイムの後、スピードのある走り



とパス回しを取り戻した韓国に対し、中国は最後までゲームを捨てずに食い下がり、得点差以上に見ごたえのある試合となった。

日　本　33（15－3 / 18－8）11　イラン

両チームとも6－0のディフェンスをしき、それぞれのセットオフェンスのできに注目が集まった。日本は、ポストを絡めた横への揺さぶりが見事あたり、イランのキーパー、パルバネスの好守に苦しみながらもカットイン、サイドシュートの連続得点となった。一方イランは、何とか9ｍ付近からのシュートを決めて、ポストとのコンビネーションを生かしたいところだが、ディフェンスを破ることができず、日本の速攻を許す結果となった。後半立ち上がり、積極的に攻めるイランは、退場のため一時は4人になる場面もあったが、粘り強く得点を取り、11分には日本のエー

ス、中山を引き出す展開となった。その後、日本のディフェンスが破れないイランに対し、ゆとりの出た日本は、フォーメーションでスカイプレーをきめるなど、危なげなくこの試合を終わった。

【男子最終結果】

			韓国	中国	日本	台北	イラン	試合	勝	引分	負	得点	失点	得失点差	勝点
1	韓　国	GF GA	＼	32 ○ 16	22 ○ 20	37 ○ 12	38 ○ 14	4	4	0	0	129	62	67	8
2	中　国	GF GA	16 ● 32	＼	24 ○ 20	31 ○ 29	34 ○ 18	4	3	0	1	105	99	6	6
3	日　本	GF GA	20 ● 22	20 ● 24	＼	24 ○ 18	33 ○ 11	4	2	0	2	97	75	22	4
4	台　北	GF GA	12 ● 37	29 ● 31	18 ● 24	＼	27 ○ 18	4	1	0	3	86	110	−24	2
5	イラン	GF GA	14 ● 38	18 ● 34	11 ● 33	18 ● 27	＼	4	0	0	4	61	132	−71	0

韓国　22 (13—7 / 9—13) 20　日本

前半3分、日本4番佐々木の退場の後、遅攻で崩せないまま速攻を許す形となり、連続得点を奪われる。6—0のディフェンスで抑える日本に対して、8番ユンのスタンディング、ロングが襲う。なんとか得点をあげたい日本は、オーバーステップなどのミスを誘われ波に乗り切れないまま終わるかと思われたが、作戦タイムの後、韓国の浮き気味のディフェンスに対し、積極的にインへ切り込み、ポストとのコンビでセットが決まりだし点差を縮めていった。後半遅攻で、走る日本とロングの韓国で点の取り合いとなり、観客をわかせるなか、日本は2点差まで詰め寄り、緊張したゲーム展開が続いた。ラスト5分日本は、韓国8番ユンにマンツーマンでディフェンスをつけ逆転を狙うが、2点差を縮めることができず、終了の笛を聞いた。

中国　31 (18—15 / 13—14) 29　台北

本大会、最終試合となったこの試合。中国は、スピードのあるボール回しからの得点、一方台北は、サイド攻撃で得点を重ねた。中盤に入ると、台北は、積極的にパスカットに出て速攻につなげ、点差を縮めた。セットでは台北13番タンが活躍、1点差まで詰め寄るが、中国も2番フアンのロングシュートなどで応戦し、均衡した戦いとなった。後半、中国のタンに対するマンツーマンでのディフェンスに対し、台北は、カットを狙うツートップディフェンスを敷き速攻を連発し、14分にはついに逆転、まさに1点が勝負をきめる展開となった。勝負を分けたのは25分台北の作戦タイムの後。中国は13番ワンのボールカットからの速攻で2点差とし、残り時間がなくなりあせる台北を抑え勝利を手にした。

日本男子

番号	氏名	台北	中国	イラン	韓国	合計
1	橋本　行弘	0	0	0	0	0
2	加藤　圭介	0	0	6	2	8
3	広政　宜孝	0	0	3	0	3
4	佐々木教裕	1	0	5	5	11
5	冨本　栄次	2	4	3	5	14
6	池辺　健二	0	0	1	0	1
7	中山　剛	3	1	3	2	9
8	岩本　真典	6	2	0	0	8
9	田中　将	0	3	0	2	5
10	斎藤　泰貴	0	4	0	0	4
13	藤井　孝志	2	0	0	3	5
16	坪根　敏宏	0	0	0	0	0
17	茅場　清	5	5	5	1	16
18	山口　修	0	1	1	0	2
20	辻　昇一	5	0	6	0	11
21	日原　一幸	0	0	0	0	0
	計	24	20	33	20	97

＊日本チーム以外の得点はすべて対日本戦のもの。

台北男子

番号		得点
1	ヤオ・シ・シェン	0
2	ライ・クァン・イン	2
3	リゥ・トン・ツァイ	0
4	リー・ハン・ロン	4
5	クオ・チー・フォン	1
6	カオ・アール・ヘン	0
7	チョン・ユエン・ツォン	1
8	ヤン・シー・チョー	0
9	ワン・チョン・チェ	1
10	スー・ター・チー	1
11	リー・チウ・クオ	0
12	チャン・ヨン・チャン	0
13	タン・チョン・ション	8
14	パン・チェン・ホン	0
15	ウー・ロン・チン	0
16	チョン・ジー・ユー	0
	計	18

中国男子

番号		得点
1	イェ・チアン	0
2	ファン・ミン	2
3	リゥ・リーフー	0
5	リゥ・チエ	0
6	ワン・ピン(2)	2
7	イェン・タオ	2
8	ホン・フェイ	0
9	チャン・チー	5
10	チュー・ウェンシン	6
11	ウー・チエン	1
12	ワン・シュエリ	0
13	ワン・シントン	6
14	リュ・ウェイロン	0
15	チャン・ハイチョウ	0
17	ワン・ニン	0
18	イェ・リチエン	0
	計	24

イラン男子

番号		得点
1	パルワネ・タブリズィ・モフセン	0
2	アリモハッマディ・ホーマン	1
3	ノデヒ・ハミド	0
5	ヘザルダスタン・ホセイン	0
7	モライ・ヨーネス	1
8	サファリ・ホッジャト	1
9	ハラジ・マジード	3
10	ザフラビ・マスィオド	0
11	ニコネジャト・ファルハド	0
12	マメガニ・アシカン	0
14	ナリ・シャーラム	1
15	ジャファリヤン・モハッマドレザ	2
16	アルボゲシ・ゴラムレザ	0
17	モンファルド	2
	計	11

韓国男子

番号		得点
1	ハン・キュンテェ	0
2	パク・ミンチュル	0
5	パク・スンリップ	0
8	ユン・キョンシン	11
9	チェ・スンウク	0
10	リム・スンシク	0
11	チャン・ジュンスン	0
12	ナム・カンヒュン	0
13	チョウ・ブイヨン	3
14	パク・ジョンジン	0
15	チェ・ヒュンホウ	0
16	リ・スゥィクヒュン	0
17	リ・ジェウー	0
18	ユン・キョンミン	0
19	チョウ・チヒョウ	1
20	ペク・ウォンチュル	7
	計	22

女 子

韓　国　36（19―14／17―13）27　北朝鮮

開幕戦となった韓国対北朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮とする)。韓国は高さを生かした堅い守りからの速攻と４番ハ・ソンヤンのポストプレーで序盤のリズムをつかみ、開始10分で５点のリード（７―２）を奪う。一方、北朝鮮も高さに対して、17番ク・ヨン・エを中心とした速いパスワークで応戦。その後、一進一退の攻防を繰り返す。しかし、両チームともシュートミスやパスミスを重ね、試合の流れを一気に引き寄せることができず、19―14と韓国が５点リードのまま、前半を終える。後半に入り、韓国は、20番オー・スンユクが連続３点を含む６得点（前後半合わせると８得点）の大活躍などで点差を広げた。北朝鮮も高さをカバーする速い攻めと守りで食い下がったが、力の差を埋めるまでには至らず、36―27で韓国が勝った。

日　本　31（15― 4／16― 3）7　台　北

両チームとも初戦のためか、立ち上がり、動きが硬く、ミスが続いた。しかし、５番田中の得点で落ち着いた日本は、速攻などで連続５得点して試合の流れをつかむ。その後もGK12番山下を中心とした守りから、７番小松、８番田中の速攻などで得点を重ねていく。台北もGK１番洪が７ｍスローを２度阻止したり、ノーマークシュートを何度も防いだりと気迫あるプレーをみせたが、力の差は大きく、15―４と日本が大きくリードして前半を終える。後半も立ち上がりから、日本は速攻や７ｍスローで確実に得点を重ねて、点差を広げていった、台北も全得点７点中、11番蘇が５得点をあげるという活躍が見られたが、試合の大勢を変えるまでは及ばず、31―７で日本が勝った。結果的には日本の大勝という形だが、ノーマークシュートなどのシュートミスやセットプレーの攻撃に課題の残る試合でもあった。

韓　国　30（15―13／15― 7）20　日　本

試合前の練習から気合いが入っていた両チーム、好ゲームが期待された。大声援に後押しされ、開始直後、ゲームの主導権を握ったのは日本。２番沖土居をトップにおいた高いディフェンスラインから積極的に守り、速攻と３番上

出を中心に組み立てた攻撃で、10分過ぎまで、６－４と２点リードする。しかし、地力に勝る韓国は、４番ハ・ソンヤンの高さを生かしたポストプレーを絡めた攻撃で、日本ディフェンスを崩し、13番ハン・スンヒ、15番リー・サンヨンらがサイドシュートやロングシュートを確実に決めていき、18分に追いつく。その後、一進一退の攻防を繰り返すが、残り２分で２本の７ｍスローのチャンスをものにした韓国が、15—13とリードして前半を終える。後半、３分過ぎから、日本のミスもあり、速攻などで４連続得点した韓国がゲームの流れを一気に引き寄せる。15番リ・サンヨンらがその後も次々と加点していき、30—20と韓国が勝った。日本もＧＫ12番山下の好セーブなどで会場を盛り上げたが、ゲームの流れまでは変えられなかった。体力・スピードなどすべての面で韓国が勝っていたといえるが、前半の日本の健闘も光った試合である。

中　国　21（8—11 / 13—10）21　北朝鮮

高さが武器の中国と速さで勝負の北朝鮮の戦いとなった一戦。試合開始から、お互いの特徴を生かした攻撃と守り



で互角の戦いをする。しかし、ＧＫを中心とした堅いディフェンスもあるが、両チームとも決め手に欠く攻撃で、９分過ぎからの約11分間、無得点のまま経過する。20分過ぎ、北朝鮮が得た７ｍスローから試合は動き出し、その後、中国は８番李にボールを集め、また北朝鮮は速いパスワークで攻撃を組み立てる。途中、３連続得点した北朝鮮が11—３と３点をリードして前半を終了する。後半になっても、両チームの戦術は変わらず、点差がなかなか動かないままゲームは進んだ。しかし、14分過ぎの北朝鮮６番ユンの退場で、中国が３連続得点して同点に追いつくと、その後、一進一退の試合が続いた。終了直前(ノータイム)、中国が７ｍスローのチャンスを得たが、得点できず、21—21の引き分けで終わる。両チームとも、お互いの特徴を生かした攻撃を組み立てていたが、シュートミスやゴール前でのパスミスなどフィニッシュの精度に欠き、課題を残した試合ともいえる。

中　国　31（16— 8 / 15— 6）14　台　北

開始から、中国の高さに対抗して、高いディフェンスラインで果敢に守る台北であったが、中国のプレッシャーに、徐々にディフェンスラインが低くなり、中国らしい攻撃がみられるようになった。中国はポストを生かしたパスワークで、ポストシュートをはじめサイドシュートやロングシュートと多彩な攻撃を行い、次々と得点を重ねていった。台北も２番クンにボールを集め、スピードある攻撃で反撃を試みるが、高い壁にふさがれてなかなか得点できず、前半を16—８と中国が８点リードで折り返した。後半、疲れが出たのか台北の動きが止まり、ファウルやミス（シュート、パス）を重ね、それに乗じて、中国は６番チェンの速攻などで次々と加点していった。後半は中国の一方的な試合展開となり、31—14という大差で中国が勝利した。

韓　国　34（16— 1 / 18— 7）8　台　北

ゆっくりしたテンポで攻撃してくる台北にリズムを狂わされたのか、韓国は、シュートが枠にいかないシュートミスを繰り返し、11分を経過して１－０（韓国がリード）という超スローな展開となった。韓国はこの流れを断つために、10番キム・ヒャンキに代え、３番キム・ジンソンを投入した。これが功を奏し、直後、３番キムがステップシュートで得点をあげると、韓国はリズムをつかみ、その後、14番ジャンの速攻などで次々と加点していった。一方、台北は、時間の経過とともに、ミスが多くなり、また、単発でシュートにいく淡泊な攻撃となった。結局、16—１と大きく韓国がリードして前半を終了した。後半、韓国は、６番リの速攻、９番ハや17番チェのロングシュート、時折見せるスカイプレーなど多彩な攻撃で台北を翻弄して、力の差を見せつけ、34—８という大差で勝利した。台北はコンビプレーがあまりみられず、個人プレーだけの攻撃では、韓国のディフェンスを崩すことができなかった。

日　本　26（11— 9 / 15—16）25　北朝鮮

立ち上がり、動きに硬さがみられ、１－２とリードされた日本であったが、６分過ぎから、徐々に速いパスワークなど日本らしいプレーがでてきた。ＧＫ１番山口を中心とした堅い守りからの速攻などが決まり、連続５得点をあげ、ゲームの主導権を握った。しかし、北朝鮮もアウエーとは思えない大声援に後押しされ、速攻やサイドシュートなどを確実に決めていき、粘り強くゲームを進めた。前半を11—９と２点日本リードで折り返す。後半立ち上がり、北朝鮮が２点を先取して同点に追いつくと、その後は一進一退の攻防を繰り返し、追いつ追われつという大接戦になる。北朝鮮はサイドからの攻撃が冴え、サイドシュートや日本のファウルで得た７ｍスローを確実に決めていき、日本は、５番田中美音子を軸とした攻撃で11番田中美代子のシュートなどで得点していく。両チームとも最後まで集中力を欠かすことなく、緊迫した好ゲームを展開した。結局、残り30秒で２番沖土居が執念のサイドシュートを決め、日本が26—25と１点差で勝利を手に入れた。

中　国　24（8—10／16—13）23　日　本

日本は最終戦を勝利で飾るため、中国は優勝するために、両チームとも負けられない一戦となったこの試合。先制したのは中国。8番リのシュートで波に乗り、4点を連取。一方、日本は中国の高さに苦しみ、なかなか攻撃の突破口を開けない。しかし、9分、エース5番田中の中国ディフェンスの間を切り裂くカットインで初得点をあげると、ゲームの流れが日本に傾く。中国にシュートを打たせないアグレッシブなディフェンスと高さの間を抜いて勝負するカットイン攻撃で一気に同点に追いつく。5－5となった16



分、日本は2人退場してピンチを迎えたが、GK1番山口のナイスセーブに助けられ、逆に、逆転に成功。前半を10－8と日本リードで終了する。日本5番田中は前半だけで8得点の活躍を見せる。後半、日本はGKを中心とした守りからの速攻などで、中国は6番リ、11番チェンのシュートなどで、両チームとも一歩も引かないシーソーゲームを展開する。残り1分、日本のパスをカットした中国が速攻で得点をあげ、1点差という辛勝で、明日の最終戦、韓国戦につなげた。GK16番ユの要所要所でのナイスセーブが勝利をもたらしたといえるかもしれない。

韓　国　31（17—13／14—16）29　中　国

勝った方がシドニーの切符を手に入れるという最終日にふさわしい対戦となった。先制して主導権を握ったのは韓国。司令塔20番オー・スンオクの速くて正確なパスが、中国ディフェンスを翻弄、ポストやサイドにボールを振り分け、多彩な攻撃をみせる。一方、中国も11番チェンらのシュートで粘り強く得点をあげ、必死に追いすがる。しかし、18分過ぎから徐々に点差が広がり、韓国が17—13と4点をリードして前半を終了する。後半になり、スタートダッシュをみせたのが中国。速攻などで得点を重ね、9分を過ぎて、18—20と2点差に詰め寄る。しかし、そこで中国は7mスローをはずしたり連続して退場者をだしたりと、傾きかけた流れをストップさせてしまう。勢いを取り戻した韓国が、速攻やカットインとスピードあるプレーで再び中国を引き離し、20分を経過して、27—20とする。終盤、中国の反撃で追い上げられるが、韓国が31—29と逃げ切り、シドニーの切符を手に入れた。この試合で、韓国15番リが13得点と大活躍した。



北朝鮮　30（11—11／19—14）25　台　北

今大会の最終戦。両チームとも未勝利でこの試合を迎え、ともに初勝利をかけた大事な一戦となった。2番クンのカットインで先制した台北は、4連続得点。その後も11番スーのシュートなどで加点していく。しかし、北朝鮮も14番リのロングシュートなどで反撃を開始する。24分に台北13番ライが退場すると、それを機に、一気に追い上げ、28分過ぎ、ついに同点（11—11）に追いつく。そのまま前半を終了する。後半になっても両チームは一進一退。台北は11番スー、北朝鮮は14番リにボールを集めて攻撃を組み立て、得点していく。7分過ぎ、北朝鮮が14番リの7mスローから4連続得点をあげ、一歩抜け出す。その後、台北も14番

ライのシュートなどで追い上げるが、21分に、2番クン13番ライが立て続けに退場して、万事休す。それを機に、速攻などで一気に突き放した北朝鮮が、30—25と台北を下して、今大会の初勝利を手にした。

【女子最終結果】

			韓国	中国	日本	北朝鮮	台北	試合	勝	引分	負	得点	失点	得失点差	勝点
1	韓　国	GF GA	＼	31 ○ 29	30 ○ 20	36 ○ 27	34 ○ 8	4	4	0	0	131	84	47	8
2	中　国	GF GA	29 ● 31	＼	24 ○ 23	21 △ 21	31 ○ 14	4	2	1	1	105	89	16	5
3	日　本	GF GA	20 ● 30	23 ● 24	＼	26 ○ 25	31 ○ 7	4	2	0	2	100	86	14	4
4	北朝鮮	GF GA	27 ● 36	21 △ 21	25 ● 26	＼	30 ○ 25	4	1	1	2	103	108	− 5	3
5	台　北	GF GA	8 ● 34	14 ● 31	7 ● 31	25 ● 30	＼	4	0	0	4	54	126	−72	0

日本女子 番号		台北	韓国	北朝鮮	中国	合計
1	山口　文子	0	0	0	0	0
2	沖土居真子	2	1	5	3	11
3	上出恵美子	3	6	0	5	14
4	松本　恵美	0	0	0	0	0
5	田中美音子	4	8	9	10	31
6	青戸あかね	3	2	1	0	6
7	小松真理子	5	1	1	0	7
8	田中由美子	4	1	3	3	11
9	山崎　理恵	0	0	0	0	0
10	中村　友美	1	1	3	1	6
11	田中美代子	0	0	4	1	5
12	山下美智子	0	0	0	0	0
13	倉知　光子	5	0	0	0	5
14	宮本奈芳美	0	0	0	0	0
15	熊谷　祐子	0	0	0	0	0
17	山下　麗子	4	0	0	0	4
	計	31	20	26	23	100

＊日本チーム以外の得点はすべて対日本戦のもの。

台北女子 番号		得点
1	ホン・ホェイ・ピン	0
2	トゥー・シアオ・ユエン	0
3	スー・チア・リー	5
4	チェン・チン・ユエン	0
5	ヤン・チン・ファン	0
6	コン・ルー・ウェン	0
7	リー・ペイ・リン	0
8	ライ・リー・チュン	1
9	ヤン・シュエン	1
10	ホワン・ウェイ・イー	0
11	チア・リン・ホェイ	0
12	リー・シゥ・ウェイ	0
13	チュー・チィ・ウェン	0
14	ライ・ワン・ユー	0
15	チュワン・フェイ・ウェン	0
16	ホン・チア・リエン	0
	計	7

韓国女子 番号		得点
1	リ・ナムソウ	0
2	クォ・ヒー・ジョン	2
3	キム・ジンソン	0
4	ハ・ソンヤン	4
6	リ・ヨンジュン	2
8	キム・ヒュンオク	0
9	ハ・ヤンソク	2
10	キム・ヒャンキ	0
12	ムン・キョンハ	0
13	ハン・スンヤン	6
14	ジャン・スンヒ	0
15	リ・サンヨン	12
16	リ・ミンヒ	0
17	チェ・ヒュンジュン	0
18	チュン・ヨンヒ	0
20	オー・スンオク	2
	計	30

北朝鮮女子 番号		得点
1	リム・キル・ファ	0
2	リ・ヒョン・シル	3
3	パク・ソン・オク	3
4	キム・スン・シル	0
5	シン・オク・ソン	0
6	ユン・キョン・オク	3
7	ユ・ウォン・スク	0
8	ホン・スン・ヒ	0
9	イム・ヒョン・エ	1
10	リ・チュンシル	4
11	キム・キョン・ヒ	0
12	パク・チュン・ボク	0
13	ユ・ミョン・ヒ	4
14	リ・ヒ・ヨン	5
15	ジ・オク・ラン	0
17	ク・ヨン・エ	2
	計	25

中国女子 番号		得点
1	リゥ・ユーミン	0
2	タン・イエンイエン	0
3	ワン・シアン	1
4	リー・ユーリン	0
5	リー・チャンファン	7
6	チェン・チー	3
7	チャイ・チャオ	1
8	リー・ピン	3
9	チャオ・イン	2
10	ツァイ・チエ	1
11	チェン・リエ	4
12	ファン・チエ	0
13	チャン・コン	0
14	コン・チエシア	0
15	チェン・ハイユン	2
16	ユー・コーリ	0
	計	24

スポーツ安全保険は
みんなの安心をお約束します。



スポーツ活動、文化活動、ボランティア活動等に最適な保険です。　5名以上のグループでご加入下さい。

加入区分		掛金	傷害保険（保険金額）				賠償責任保険（補償限度額）	共済見舞金
			死亡	後遺障害	入院	通院		
A	子供の スポーツ活動等 成人の 文化活動、ボランティア活動、地域活動	450円	2,000万円	最高 3,000万円	1日につき 4,000円	1日につき 1,500円	身体賠償 1人 1億円 1事故5億円 （免責1,000円） 財物賠償 500万円 （免責1,000円）	突然死 140万円
B	老人の スポーツ活動	800円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		
C	成人の スポーツ活動	1,400円	2,000万円	3,000万円	4,000円	1,500円		
D	山岳登はんなど	9,000円	500万円	750万円	1,800円	1,000円		

対象となる事故 ── ●グループ活動中の事故　●往復途中の事故
保険期間 ── 平成12年4月1日から翌年3月31日まで（申込受付は3月から）

加入用紙、資料請求、お問い合わせ

〒150-8050　渋谷区神南1丁目1番1号　岸記念体育会館

TEL 03-3481-2431

財団法人 スポーツ安全協会

ホームページアドレス　http://village.infoweb.ne.jp/~fvgm7190/index.htm

保険については東京海上を幹事会社として、右記損害保険会社20社との共同保険となっております。

朝日火災　共栄火災　興亜火災　住友海上　セコム東洋　大成火災　太陽火災　第一火災　大東京火災　大同火災
千代田火災　東京海上　同和火災　日動火災　日産火災　日新火災　日本火災　富士火災　三井海上　安田火災

パネルディスカッション
スポーツ文化構築のために（1）

［コーディネーター］
杉山　茂：スポーツマネージャー・文部省保健体育審議会委員・日本体育協会国体委員
［パネラー］
佐藤　宣践：（財）日本オリンピック委員会選手強化本部長・（財）日本柔道連盟国際委員長
岡野　昌弘：（財）日本バレーボール協会常任理事・Vリーグ実行委員長
金子　正子：（財）日本水泳連盟理事　シンクロ委員長・オリンピックヘッドコーチを歴任
河野　一郎：（財）日本ラグビーフットボール委員会強化推進本部長・国際ラグビー連盟　技術委員会委員
野田　清：（財）日本ハンドボール協会常務理事

【杉　山】最近、「スポーツは文化である」といわれることがあります。また、スポーツのみならずあらゆるジャンルにおいて、「21世紀にむけて、新しい…」と、いわれることもあります。しかし、スポーツにおいての物事は急に始まるわけではなく、時の流れの中で徐々に変化していくものです。また、スポーツ文化については、古くから日本のスポーツ憲章でも謳われている事であり、今改めて声高に訴えることではないような気がするのです。

むしろ今の時期に、こういったことをスポーツの人間が互いに言い合うのは、弱々しい、世紀末的な思いさえ抱くのです。しかし、このようなことは何もハンドボールだけに見られることではないはずです。日本のスポーツ界全体が向かうべき大きな壁ではないでしょうか。

今日お集まりの方々のハンドボールとの接点は、学校体育の中にあったと思います。逆に学校以外のところでは、ほとんど触れることはなかったようですし、むしろよくぞハンドボールに触れていただいたと思うくらいです。

しかし、これは実はほとんどの競技に当てはまることではないでしょうか。学校のハンドボールと日本のハンドボール、学校のスポーツと日本のスポーツ、これはこのハンドボールフォーラム21の柱じゃないでしょうか。

河野さん、浅見先生のお話で、学校のスポーツが日本のスポーツとなってここまで歩んできたことが、マイナスではなかったけれども、これからの発展には、問題を生じさせる。あるいは、トーナメントよりはリーグ戦の試合形式をというお話がありました。そのあたり、ハンドボールと同じ球技である、ラグビーのお立場のご感想から始めさせていただきたいと思うのですが。

【河　野】スポーツがグローバル化しているという過程の中で、明らかにズレが生じてきているなと思っています。子供達が、これはメディアの影響が強いんですけれども、日本でやっているラグビーと全く違うラグビーをテレビで観ることができる。コーチングにしてもどんどん外国へ出ることが可能になってきていますから、何らかの変革というものを、逆に今の子供達のほうが感じているんじゃないかと思っています。

【杉　山】日本のスポーツは学校のスポーツを中心に発展してきたと述べましたが、実は違うんだというのが金子さんのシンクロナイズドスイミングではないかと思います。情熱のある指導者が、これだけの世界的レベルの選手を育てるという、すばらしい成果を上げられてきたと思うのですが、そこに至るまでの経緯と問題点をお教えください。

手作りのスポーツ組織から
（シンクロナイズドスイミング）

【金　子】はい、一人の選手を育てるのに最低7年、オリンピックで花が開くまでに13年、15年とかかっていく競技です。ですから、一貫して選手達を育てていかなければそこまでつながっていかないので、学校に任せておくわけにはいきません。情熱のあるコーチが、選手を引きずるようにして育ててきました。

ですが、非常に私達がスポーツとして認められるまでには、

苦労があり、時間がかかったと思っています。今、欧米諸国の見よう見まねの時代から、ロスからソウルまでの4年間を契機に、世界のトップの座を維持するための日本独自のトレーニングをするようになりました。

また、選手達の年齢を踏まえた一貫教育の中で、逆に学校スポーツと連携をできない苦しさといいますか、貧しさというのを逆に感じています。専門競技にくる前に、小学校でもっといろんな基本的な運動能力を身に付けていたら、日本の選手達はもっと伸びるんじゃないかということを感じています。球技がすでに始められておられるように、私達芸術スポーツも連合して、子供達の基礎運動能力を上げるための、一貫したトレーニングをやっていけたらいいと思っています。

杉山：なるほど、佐藤さん、柔道の講道館というのも言い方を変えれば一つのスポーツクラブではないでしょうか。クラブと学校、町の道場で育った柔道が中学校や高等学校に入ってくるのと、学校スポーツの中で柔道を芽生えさせるのと、どちらのウェイトが高いんでしょうか。

教育と近代スポーツ（柔道）

【佐　藤】嘉納先生ご自身が柔道は教育であるといわれたことからも、地域の道場はあくまで教育機関の一つとして捉えています。その意味で特に学校柔道、次に強さの象徴である警察柔道、そして社会人になってもという実業団柔道が3本の柱になります。

しかし、柔道においても、競技者の減少は深刻な問題であります。まあ小学生の時代には、骨接ぎの方々が指導されるたくさんのクラブが町にありましたが、それが中学校につながらないことが大きな原因でしょう。それは中学校における柔道の先生が非常に少なくなってきているためです。そこで、クラブスポーツを、中学校においても上手く導入できないだろうかと、現在取り組んでいる最中です。

【杉　山】嘉納先生が柔道は教育であると打ち立てられて、



それが日本の柔道のある理念、基本姿勢になったということはすごく分かることです。しかし、精神として受け継ぐことができますけれども、畳の上では近代スポーツ化してしまった。日本のスポーツのある理念というものが、国際化によって新しい時代を迎えなければならないように思います。

岡野さん、レクリエーション性が重きをなしていたバレーボールは、東洋の魔女や男子が金メダルを取ることによって、学校や特に企業といったものに非常に根強く関連されていった歴史がありますね。そこのところを、Ｖリーグの構想などにも入っていただいてお話いただけますでしょうか。

地域・企業との関係づくり
（バレーボール）

【岡　野】ロセンゼルスオリンピック以来、商業スポーツとしてのビジネスの可能性がいわれるようになりました。日本リーグ加盟企業でも、おそらくスタートは社員の士気高揚とか福利厚生、マスコミなどへの宣伝とか広報の一環として強化をされてきたでしょう。

しかし、経済環境の変化に伴い、もう一度Ｖリーグの意義を考えねばならない時期にきています。一体、我々Ｖリーガーは社会に何ができるか、何を発していけるだろうかということです。

また、従来の枠にとらわれない環境作りが必要ということで、Ｖリーグの事業化の収益の再投資が必要です。それは、3つあると思います。まず、チームへの再投資・強化。次に広報。3つ目は所有物と経済基盤への投資。地域との共存にはこれらが不可欠でしょう。

さらに、今まではどちらかというと、Ｖリーグは企業よりも協会主導型だったわけです。協会の都合などで、会社のある地元ですら試合ができないこともある。経済状況が厳しい今日、我々が企業に積極的に取り組んでいただけるようになるためには意識改革が必要であると思っております。

【杉　山】スポーツが社会に何ができるかという今の岡野さんの提言といいますか、考えていらっしゃることは非常に大きなポイント。それから企業とスポーツ。それからメディア対策。スポーツ団体の事業化、スポーツの事業化という部分はこれからのスポーツに大きなウェイトを占めることだろうと思います。そこで河野さんに、日本ラグビーフットボール協会構図の一部を、ご紹介いただきたいと思います。

新しい組織作りに向けて
（ラグビーフットボール）

【河　野】1995年の第3回ワールドカップにですね、ニュージーランドに145点、ギネスブックに載る大敗を致しました。

その時に感じたんですが、多分一番差があったのは、頭のほうじゃないかと思ったんです。つまり球技というもの、ラグビーというものに対する取り組み方。そして3番目は、技術や戦術、ルールなどの世界の流れに対して、リードするのではなくて受け身であったことが、僕が大きく感じた点でした。

そういったことを踏まえて、我々はナショナルチームで、ジャパンプロジェクトというものを始めました。その時この3つを柱に考えました。まず、ラグビーは本当は頭がよくないとできないスポーツであり、それが一番ニュージーランドとの差なんだと。2つ目はやはり、従来型の組織ではまず勝てない。3つ目は、自分達が新しく変えるんだという意識がないと勝てないということ。この3点を私は具現化したいと思いました。

私のこれまでの経験でも、馬鹿な選手は絶対代表にはなっていませんし、私はラグビーの中では3つのインテリジェンシィということをいっております。一つは従来型の知能指数に代表されるIQですね。その次は少し前に話題になり、社会の中でも認められていますEQといわれている情緒的なインテリジェンシィ。3つ目はスポーツインテリジェンシィというものがあるだろう。これはどういうものかといいますと、特に球技系の場合はいいプレーヤーというのは必ず場面をしっかり覚えている。いいプレーヤーというのは必ずいい戦術の組み立てができる。スポーツと知、私はこれからのスポーツの生き残りは、この知というものにどうやって取り組んでいくかだと思っています。

次に組織の点なんですけれども、僕はもうフラットな組織にしないと絶対勝てないんじゃないかと思うんですね。従来型の監督とサポートスタッフの関係ではなくて、ナショナルチームの中では、平尾監督もテクニカル等のスタッフも、全てフラットな立場でいきましょうよとした。これのほうが監督も楽なはずなんです。そこにおいて、内部批判がオープンにできるようにして、活発に議論を戦わせるようにしました。

3つ目ですが、日本の選手は監督・コーチの言うことを、ただ具現化できるのがいいとされる時代があったように思います。ところが海外に出るとですね、自分の頭で考えることができないやつは、まず使い物にならないんですね。これからのスポーツは知と情報だと思うんですが、僕らの今やっていることは選手に資料を与えているんです。選手は資料を情報に変えられるかなんです。つまり、知識伝達型のチームから、知識創造型のチームにする。戦いの質の変化とコーチング活動というのは、ただ受けるのではなくて、いかに考え、リードしていくかということに視点を向けていかないと、なかなか勝つことはできない。

こういったことを解決するためには知恵と情報です。自分の競技団体だけでやっていたのでは解決策はない。そこで、自分なりに一競技団体だけではカバーできないと思うものを整理させていただきました。一つはマネージメント。その次にテクノロジーの分析。そしてそれらの財産を各競技間で共



有していくことです。例えば、ラグビー協会では500万円のデジタルビデオを試合や合宿の際に常に活用していること。ハンドボールが熊本で成功した栄養面のノウハウ。スピードスケートの清水選手のトレーニング法など。他競技の方がこれらを御存じですか。こういった知識を共有していかなければ、日本のスポーツは効率よく発展していかないと思います。こういうことを考えて、球技系サポートプロジェクトを発足させています。まあ最初はゴール型というところの方が効率がいいというところで、こういう話をさせていただいています。

【杉　山】ありがとうございました。野田さん、今のラグビーフットボール協会のお話を聞いてどのようにお感じになりましたか。

【野　田】はっきり申し上げて、ハンドボールでは少し時間がかかると感じています。組織をフラットにして成功した例はあるのでしょうか。

【杉　山】馬鹿だと代表選手になれないというのは言い当てていると思うんです。学業の成績だけではない。得てして、スポーツをやってさえいれば、という中央突破が逆にスポーツそのものの誤解を生み、社会に何ができるかという部分の欠落を生み、自身の首を絞めてきたように見えます。

野田さん、ラグビー協会やその他の球技団体と手を携えて、これらのことを実現していただくことを期待しています。

【野　田】わかりました。我々も点ではやっているんですが線の状態では結びついていません。是非参考にさせていただきます。

【河　野】組織づくりの中で一番苦労したのは人でした。フラットな部分でそこに納まってくる人が必要でした。お互いに同じ方向を向いて、適切な注文を遠慮なくつけられる関係が必要でした。

【杉　山】佐藤さんもかねがね、チャンピオンとメダリストで競技団体を運営する時代は終わったといわれていますね。このあとは、これからどうするという話し合いにしていきたいと思っています

（この続きは次号に掲載いたします）

高体連の現状と課題

—全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部創設50周年記念誌から—

全国高等学校体育連盟ハンドボール専門部　委員長　佐藤　喜一

◆はじめに

昨年、全国高等学校体育連盟ハンドボール部が設置されて50周年を記念した「50年誌」が刊行されました。一口に50年と言いますが、その歴史は諸先輩方の情熱と汗と犠牲の上に築き上げられたものです。今、少子化、価値観の多様化など高等学校現場を取り巻く環境が大きく変わり高体連の意味付けもそれに合わせて変わろうとしています。しかしながらその様な変化の中で、高等学校のスポーツの果たす役割は増すことはあっても少なくなることはありません。21世紀を間近に控え、次の50年に向けた手がかりとしてこの「50年誌」を編んだ意義は大きいと思います。

さて、今回はここで現在全国高体連が抱えている2つの問題点について歴史的流れの中から模索し、その解決策を考えていきたいと思います。

◆高体連登録のチーム数の推移

まず、ハンドボール競技の発展は高校でのハンドボールの普及が重要な鍵となっています。その高校界の50年間の歴史で語ることができるのではないか、それは高校での登録数が大きなバロメーターとなっており、登録数の動向で普及発展の歴史がわかります(表1)。

記録によると昭和25年に31県男女350校で出発して、当時は男女1,000チームを目指して普及活動に奔走されたようで、その結果47都道府県がそろって大会参加できるようになったのは創設より18年後の昭和42年でした。特に、飛躍的普及の最大の要因となったのは昭和43年福井国体から高校チーム（少年男女）が、都道府県のチーム編成は単独校または2校以上の混成でもよいとなったことで、この国体参加資格の改正が高校ハンドボールの発展に拍車をかけるきっかけになったと考えられます。

表1

年　度	加盟県	男　子	女　子	計
昭和26	36	280	120	400
昭和34	37	287	152	439
昭和42	47	600	393	993
昭和52	47	1039	702	1741
昭和60	47	1361	1013	2374
平成 6	47	1495	1115	2610
平成10	47	1324	964	2288

このことにより高校ハンドボールも徐々に普及発展するようになり、昭和44年（20周年）時には念願の男子680・女子434計1,114チームとなり、永年の目標であった男女1,000チーム登録を達成しました。昭和52年には男子単独で1,039チームとなり、8年遅れて昭和60年には女子も、1,013チームとなるなどして素晴らしい発展を遂げ、男女合計では平成6年（45周年記念）時に2,610チームと最高登録数を記録しました。しかし、平成10年になって残念ながら女子チームの登録が964となり、今後は男女ともに生徒の少子化の波を受け大幅にチーム編成が困難となり減少することが予想されるので専門部としても早急に対策を練ることが必要となってきました。

◆各都道府県の問題と課題

つぎに、各都道府県高等学校ハンドボールチーム専門部の抱える問題点や今後の取り組みについて、参考までに50周年記念を契機に記念誌より分析をしてみました。

(右ページ表2参照)

◆まとめ

各都道府県の諸問題について推察すると、以下のことで総括できるのではないかと思います(**右ページ表3参照**)。

21世紀を目の前にして、社会現象でもある生徒の少子化による部員不足、休部、廃部等の問題が最大の関心事となっています。専門部もこれを避けることのできない事実として危機感を持ちながら対処しなければならず、この状況の中で如何に部を存続継承するかは第一に、指導者の手腕にかかるのではないかと思われます。第二に、社会の急激な変化は生徒を取り巻く生活環境に少なからず影響を及ぼし、学校現場では人間関係の希薄化や活発に運動する者とそうでない者との二極化が進んでいることも実態であることと、都道府県での教員採用者が激減していることも要因であると考えられます。

表2

北海道	少子化の中でのチーム数の減少・指導者養成の足踏み状態の打破
青森県	指導者、審判員の養成・チーム数、競技者数の維持・競技力向上
岩手県	小学校への普及・中高校の指導者の資質向上・生涯スポーツとしての環境づくり
宮城県	ジュニアの強化・指導者の配置・平成13年国体開催に向け運営と選手の強化対策
秋田県	スポーツ少年団の各地への普及・中学校への働きかけの活性化・小、中、高校一貫指導
山形県	高校入学後、継続して活動できる条件づくり・中高校連携した指導体制の確立
福島県	若い人たちに、積極的に責任を持たせる、部会関係者一丸となって自チームのみならず、広い視野にたったものの見方、考え方をする。・普及活動
茨城県	指導者、加盟校、部員確保をめざす。平成14年のインターハイ開催成功に向け努力する。
栃木県	普及拡大と若手指導者の育成。小、中学校の普及や強化
群馬県	部員減少・指導者の高齢化・チームの減少・小学校への底辺拡大
埼玉県	全国王座の奪還・指導普及・底辺の拡大・加盟校の減少の歯止め対策
千葉県	指導者の育成（適切な指導者の配置）・選手層の充実・組織の充実
東京都	学校体育（小、中学校）への普及と交流・若い指導者の育成
神奈川県	チーム数の減少対策・競技会の確保、競技日程の過密化の解消
山梨県	部員数の確保・競技力、審判技術の向上・専門指導者、審判員の確保育成
長野県	中学校からの継続と高校での普及・指導者の養成
新潟県	指導者の育成・中学校に部の育成・高校指導者の高齢化
富山県	チーム数の減少でハンドボール人口が懸念される・2000年の国体優勝をめざす
石川県	ジュニア層の発掘と育成・競技人口の拡大・指導者育成
福井県	チーム数の確保・底辺の拡大・指導者の育成
静岡県	中学生チーム数の拡大・指導者育成・競技そのものを一般に普及
愛知県	男子の競技力の向上、強化・少子化の中での普及と活性化・大会運営の拡大
三重県	部員不足・若手の専門指導者の育成・普及や強化面の充実
岐阜県	施設設備等の整備・12年度全国大会の成功に向け全力で努力する
滋賀県	チーム部員数の減少傾向・全国レベルのチーム強化育成する
京都府	競技場の確保と日程調整・急激な部員減少の対策・競技の魅力のアピール
大阪府	部員減少と指導者の転勤による廃部・指導者のメンタル面等の資質向上
兵庫県	チームの減少・指導者の高齢化・審判員の確保・運営費の捻出・会場確保
奈良県	小中学との密接な連携・指導者の底上げと人材の発掘・施設設備の充実
和歌山県	指導者の時代に合わせた指導方法・一般への普及の啓蒙・指導体制の確立
鳥取県	少子化に伴い登録数の減少・廃部の防止と普及活動に全力投球をする。
岡山県	底辺拡大と全体のレベルアップ・強化指導者の資質の向上と意識の改革
広島県	指導者の養成と普及の遅れが部員不足を招いている・底辺の拡大と指導者養成
山口県	競技人口の確保・競技力の向上・指導者養成・会場予算、指導者の確保
香川県	協会からスポーツ少年団への援助・指導者の育成・普及強化の２本立ての指導
徳島県	スクール及び中学校への働きかけ・指導者の育成が急務・指導者の熱意・資金の調達
愛媛県	競技人口の減少・指導者の資質の向上・中体連との連携をして人材の確保
高知県	競技力の向上・息の長い強化に取り組む・強豪と言われるチーム作りを目指す
福岡県	部員確保［普及と強化］・組織のスリム化・財源確保・指導者、審判員の養成
佐賀県	組織、施設の充実・底辺拡大・指導者の養成・競技力向上
長崎県	中体連と連携を密にして強化を図る・平成15年度全国大会開催に向け強化する
熊本県	小中高校との一貫した強化の連携・平成13年全国大会開催に向け組織の充実
大分県	チーム数減少の歯止め・指導者不足と高齢化・平成20年国体開催に向け普及強化
宮崎県	中高校一貫指導体制の確立・指導者と部員の確保と養成・社会人スタッフの養成
鹿児島県	チーム数の減少・指導者の高齢化・素人の若い教師の養成・小中高一貫した指導
沖縄県	審判員の確保とレベルアップ・情報部の創設・協会各部との連携・審判長の県外派遣

表3

①チーム、部員数の減少	→	小中高の一貫指導体制の確立・底辺拡大
②指導者不足（高齢化）	→	若手の養成（講習会などの実施）
③審判員の確保と養成	→	審判講習会・県外派遣（予算の確保）
④大会会場の施設整備と確保(運営予算の捻出)	→	協会との連携

なお、今日のハンドボールの隆盛は、昭和38年から昭和51年までの13年間、国民体育大会において教員の部が実施されていたことによるもので、教員チームの選手が採用され、そこで経験した選手によって普及・強化をもたらし、その指導者により現在を支える諸先輩方の意志を継承してきました。しかし、これらの指導者も高齢化に伴って指導意欲が減退し、また数少ない若い指導者のライフスタイルや考え方の違い等で顧問不在のチームが増加傾向にあるため、今後は競技者や登録チームが急速に減少し全国的にみて年間100チーム以上が減ると予測されます。

◆おわりに

うれしいことに、小学校での学習指導要領の改訂で初めて今回からハンドボールを体育に取り扱いの中に加え指導することができることは、今後の普及に大いに期待されるのではないかと思います。また、復興のための解決策として、まず国民体育大会において教員の部が再度復活することが活性化の近道ではないかと思われますので、日本協会から文部省や関係機関に対して要望をお願いしたいものです。

「初の異競技連携に期待」

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー Free Throw

ミレニアム、2000年を控えた昨年暮れのことだった。広島市内で将来の日本スポーツ界の姿を占う初の会合が開かれた。地域との共有化での発展を掲げるＪリーグの呼びかけに賛同した４競技団体が一同に介したもので、日本オリンピック委員会理事でもある日本ハンドボール協会の市原則之専務理事をはじめ、サッカー、バレーボール、バスケットボールのリーグを運営する団体が意見を出し合った。

景気低迷から企業スポーツは現在、厳しい環境にさらされている。ハンドボール日本リーグ女子も、来季からすでに廃部が決まっている大和銀行のほか輝かしい戦績を誇る大崎電気、ジャスコが活動を休止するという。バスケットボールも例外でなく、数社が今季限りでの撤退を表明している。厳しい不況の嵐が、容赦なくスポーツの世界に吹きつけている現状は、もう避けて通れない。

そもそもわが国のスポーツは欧米とは異なる形で発達してきた。いわゆる学校スポーツ、そして企業へのオンブにダッコである。これがいま不況という嵐に巻き込まれ、リストラの標的にされたといえよう。

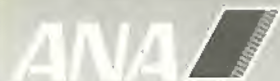
そうしたなか、今回の４競技団体の日本スポーツ再建へ向けての会合は意義がある。これまでの競技団体ごとの垣根を越え、それぞれの枠を取り払って積極的に交流を図っていこうという取り組みは、将来の日本スポーツの姿を先取りしたものである。

やはり今後の日本スポーツ界は、地域にどう密着し、手を携えていくかが重要である。住民の中に溶け込み、市民スポーツを土台として発展が図られるべき姿に変わっていかざるを得ないだろう。

今回の会合では、今年の出来るかぎり早い時期に、地元のチーム、競技団体、さらには自治体を加えて実務レベルの話し合いを重ねて、活動内容などを詰めることになっている。縦軸から横軸を伸ばしての生き残り作戦と言ってもいいかもしれない。住民にスポーツを正しく認識させることにもつながるかもしれない。

日本スポーツの意識革命と位置づける初めての異競技連携は、まさに画期的な試みである。しかし、これが掛け声だけで終わってはあまりにも寂しいし、影響は大きい。せっかくのきっかけだけに、その芽はみんなの努力と熱意ででっかく育てたいものである。

今回集まった４競技団体のリーグがすべてそろっており、プロ野球も持つことから選ばれたモデル都市「広島」の果たす役割、責任も重大である。手を携えての日本スポーツ界再建へ、各競技団体はもちろん日本国民全部が注目しなければならない「重大」な出来事といってもいいだろう。ハンドボール協会が主導権を握って、ぜひとも成功に導いてもらいたいものである。

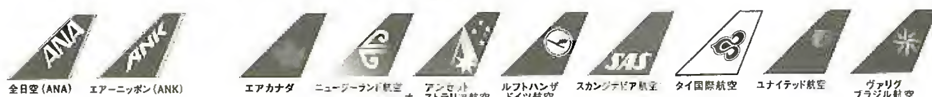


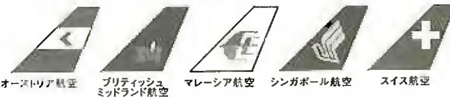
※貯めたマイルは、航空券に換えてからご利用ください。

The MILEAGE of MILEAGES

ネットワークがひろがって、マイルがさらに貯めやすく、使いやすくなりました。

今、全日空の空が大きく広がろうとしています。充実した国内線はもちろん、国際的な航空会社ネットワーク「スターアライアンス」への加盟により、国際線もさらに拡大。マイレージも、ぐっとワイドに貯まります。選ぶなら、やっぱり「ANAマイレージクラブ」。貯めやすさが断然ちがいます。





ANAマイレージクラブ

10月31日 全日空は、スターアライアンスに加盟。世界112ヶ国以上、760以上の都市をネットワークで結びます。

列島縦断【香川県の巻】

香川県のハンドボールの現状

香川県ハンドボール協会理事長　横山和司



私が前理事長の松原忠氏（現協会副会長）から、この職を受け継いだのが平成８年、30代半ばの時であった。前理事長は20数年に渡り、県のハンドボール界を支え、大きな功績を残された方だけに、私にその任が務まるかどうか不安とプレッシャーのなかで引き受けることになった。協会をはじめ多くの方々のご協力のおかげで、なんとかこの４年間を乗り切ることができたが、まだまだ若輩者であり、十分に職責を果たしているとはいえない。今回、日本協会からの執筆依頼により各種別の現状について簡単に述べたい。

〈小学生〉

平成５年の東四国国体を契機として、少年男女の開催地である香川町に小学生チームが誕生した。平成６年度に同町で第１回の西日本小学生大会を開催し、近畿、中国、九州、沖縄等から多数のチームが参加し盛大な大会となった。第４回大会から岡山県に開催場所を移したが、同町の小学生チームは熱心な指導者に恵まれ、活発な活動を続けており、香川県のジュニア育成の源となっている。平成10年度には香川町の隣町である塩江町にハンドボールスポーツ少年団が結成された。団員は町内でも山間部にある上西小学校の生徒。全校生徒20人の小さな学校であるが、全員がハンドボール部に所属し、学校や保護者からの全面的な支援を受けながら活動を続けている。全国的に生徒数の減少、ハンドボール競技人口の減少傾向のなかで、このような小学生からの活動こそが、将来の香川県のハンドボールにとって最も重要であると考えている。現在の小学生の活動は、担当していただいている平木一令氏（香川町役場）のご尽力や、香川町ハンドボール連盟、香川町、塩江町等のご協力に頼る面が大きいが、協会としても今後重点的な取り組みをしていきたい。

〈中学生〉

中学生の全国大会での活躍は、平成２年の全国中学生大会で男子３位（香川一中、綾南中）、女子準優勝（山田中）の好成績を修めたことが記憶に新しい。その選手達は平成５年の地元国体（東四国国体）で少年男女の選抜チームとして、女子２位、男子３位という成績をあげ総合優勝に貢献した。

中学校の強化は各チームの指導者に頼る面が大きいが、本県では各校の新チーム結成時期に県選抜チームを結成し、年間を通して合同練習会や遠征を行っている。平成10年度より香川県のジュニア強化競技に指定され、選抜チームは年末のＪＯＣジュニアオリンピックカップでの上位進出を目指し活動している。今年度は男女とも四国予選を制し、アベック出場を果たした。同大会では平成６年に男子選抜チームが準優勝という成績を残してはいるが、さらに上を目指し、中体連専門委員長の多田宣行氏（香川第一中学）を中心に熱心な指導が行われている。また、本県では毎年３月に香川町を主会場として近県中学ハンドボール大会を開催している。今年度で12回目となるこの大会は、沖縄から北信越までの約80チームが参加し、技術の向上とともに交流を深めている。この大会は強化・普及という点で大きな意味を持っており、香川町のご支援のもと、今後とも継続・発展させていきたい。

〈高校〉

本県のハンドボールの歴史は高体連の歴史と重なる。高体連の設立は昭和34年であるが、昭和24年の協会設立当時は高校男子４、女子１チームからのスタートであった。その後、三本松高校から２名のオリンピック選手（松下仁美氏、山本伸二氏）を輩出し、県出身の２名の全日本女子監督、樫塚正一氏（高松第一高校出）、緒方嗣雄氏（香川高校出）が就任したが、県下高校の全国的な活躍はなかなか実現しなかった。しかし、平成５年の東四国国体で選抜チームが男子３位、女子２位という好成績を残し、翌年の平成６年には香川中央高校が選抜大会、高校選手権ともに制し、春夏連覇を成し遂げた。その後も、香川県勢は確実に全国で活躍を続けている。香川中央高校の活躍は周知のとおりであるが、平成９年の高校選手権では、久々に全国の舞台に復帰した高松工芸高校がベスト８に進出した。また、選抜チームはここ数年男女とも四国予選を突破し国体出場を果たしているが、特に男子は第50、51回大会で５位、53回大会ではベスト４の成績を残している。

高校の強化は、東四国国体前から選抜チームの監督を務める亀井好弘氏（香川中央高校・高体連専門委員長）の情熱的な指導が全国上位への突破口を開いた。亀井氏を含め、河合哲氏（高松工芸高校）、田中潤氏（高松高校）などの若い指導者が高いレベルで競い合い、全国的に見ても見劣りのしない実力を維持している。女子についても熱心な指導者に恵まれ、精力的な活動を続けており、今後の活躍が期待できる。

〈クラブ・実業団他〉

近年、県下の社会人チームの活躍は目覚ましいものがある。男子は、平成４年から８年まで全日本教職員大会を５連覇、殆ど同じメンバーでのぞんだ平成８年の第１回ジャパンオープンも制し、平成10年まで３連覇を成し遂げた。選手から信頼の厚い大谷和彦監督（塩江中学）に率いられ、元全日本トリオの河合（高松工芸高）、田中（高松高）、後藤（綾南中）をはじめ長身ポストの加藤（高松商高）等の教員を中心とした香川クラブは国体においても常に上位に進出している。また、全日本総合選手権でも日本リーグ勢と互角に戦い、最強のクラブチームと言われている。中心選手が30代にさしかかっており、若い選手の補強が今後の課題である。

女子では、香川銀行（大林一友会長・県ハンドボール協会会長）が平成９年末に実業団登録し、武津優子監督のもと意欲的な活動をしている。県内に実業団チームが誕生したことにより、県民のハンドボールに対する興味・関心の高まりを期待している。平成11年から、奥田新治氏を湧永製薬より迎え、強力なスタッフでチームの強化にのぞんでいる。

以上各種別の現状を簡単に述べたが、今後とも強化と普及を推し進める運営をしていきたいと考えている。強化については小早川道孝氏（強化部長・富士建産）を中心に各種別の連携をはかり、系統立てた強化方法を進めていきたい。また、普及についても日本リーグ等の誘致をはじめ、小学生から社会人までが楽しめるハンドボールの場を提供していくとともに、香川銀行のご協力を得ながら、実業団チームを持つ県として、ハンドボールが県民のスポーツとして定着するように努力していきたい。

平成11年度コーチ・レフェリー・シンポジウム開催要項

1、開催の目的（財）日本ハンドボール協会公認指導者、ならびに、公認レフェリーを対象に、今日的なハンドボール界をとりまく諸問題、効果的指導法、判定をめぐる諸問題等の分析・検討をすることによって、指導者、レフェリーとしての各々の資質向上をめざすものである。さらに、将来の日本のハンドボールのあり方を模索するために、活発な情報交換と研究協議を通して連帯感を深め、より一層の組織的充実・発展を図るために開催するものである。

2、主催（財）日本ハンドボール協会

3、主管（財）日本ハンドボール協会指導委員会
（財）日本ハンドボール協会審判委員会

4、期日　平成12年3月10日（金）～12日（日）

5、場所　東京代々木オリンピック記念青少年総合センター
〒151－0052 東京都渋谷区代々木神園町3－1
（新宿駅より小田急線で2つめの駅、参宮橋下車、徒歩5分）

6、内容と日程　別表の通り

7、参加資格（財）日本ハンドボール協会公認指導者、公認レフェリー、都道府県ハンドボール協会指導者組織を代表する者（指導者担当者等）、都道府県ハンドボール協会審判組織を代表する者（審判長等）、日本リーグの各チームを代表する者（監督等）、都道府県ハンドボール協会、各連盟において推薦された者

注）日本リーグ審判員については、講習参加ポイントとなります。

公認指導者については、義務研修の一つとなります。

指導者担当者・審判長等については、各都道府県協会より、それぞれ最低各1名のご参加をお願いいたします。

日本リーグチームにおいては、最低1名のご参加をお願いいたします。

8、経費　参加費4000円

宿泊は、施設の関係上45名前後代々木のセンターの宿泊が可能です。（申し込み順）

代々木のセンター宿泊希望の方は、参加費と宿泊費8000円が必要となります。

宿泊費には、10日（金）夕食から12日（日）朝食までの食事代が含まれます。

資料代は、別途制作実費を受付時に徴収いたします。

9、参加申し込みは必要事項を明記し、FAXにて日本協会宛申し込んで下さい。参加費につきましては当日受付にて徴収いたします。なお、宿泊をご希望される方は部屋の空き状況を下記まで直接お問い合わせ下さい。

申込先：日本ハンドボール協会コーチ・レフェリー・シンポジウム係　　FAX：03－3481－2367

記入事項：氏名、年齢、住所、自宅TEL、勤務先、勤務先TEL、公認審判員資格（持っている方）、公認指導者資格（持っている方）

『3日間は出られないがどうしようか』という問い合わせがきています。前提は全日参加ですが、どうしてもという方は可能な日のみの参加も歓迎いたします。

その際の宿泊につきましては下記までお問い合わせ下さい。

10、その他　公認指導者の方は日体協から送付されております「公認指導者手帳」をご持参下さい。

公認審判員の方は「公認審判員手帳」をご持参下さい。

公認指導者は「講習会参加証」に、審判員には、「講習会受講印」を押印いたします。

なお、この件に対するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

（財）日本ハンドボール協会
（指導部）笹倉　清則　TEL 03－3300－3304（日女体大）
（審判部）花野　誠一　TEL 042－721－1582（昭和薬大）
090－1043－7487（携帯）

内容と日程

日時	3／10（金）	3／11（土）	3／12（日）
8：30		討論会報告 4部門代表	世界トップの戦術 男子Nスタッフ
10：00		日本の強化 男女Nスタッフ	ビーチハンドボール 小学校におけるハンドボール
13：00	受付 協会理事挨拶 市原・大西	熊本予選分析 強化・指導委員	
15：00	レフェリングについて 斉藤審判長	ルール変更の傾向 審判委員会	
18：00	一貫化指導 強化委員会		
20：00	4部門に分かれて討論会（審判とコーチ）		

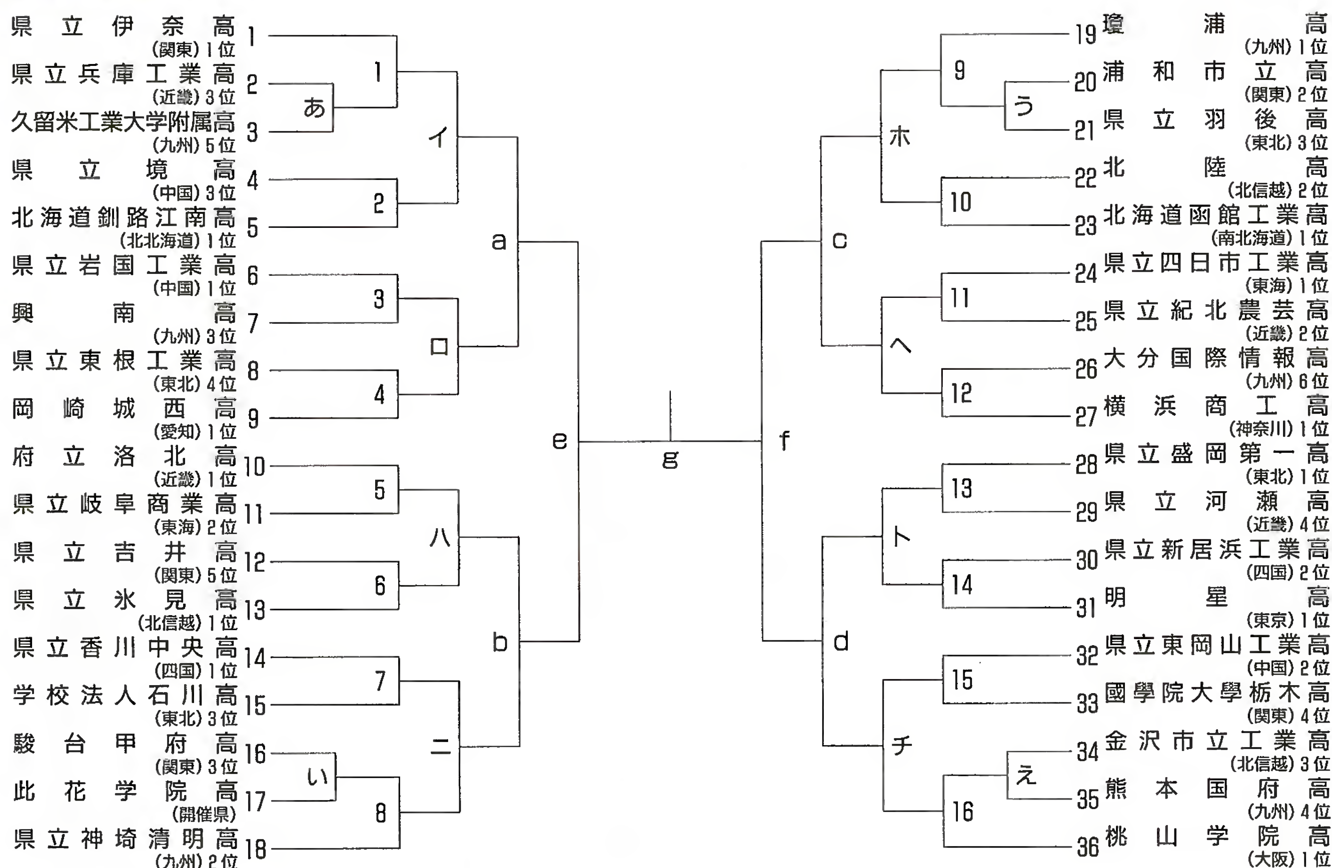
※講師の都合により、内容が一部変更になることがあります。ご承知おきください。

平成11年度（第23回）全国高等学校ハンドボール選抜大会要項

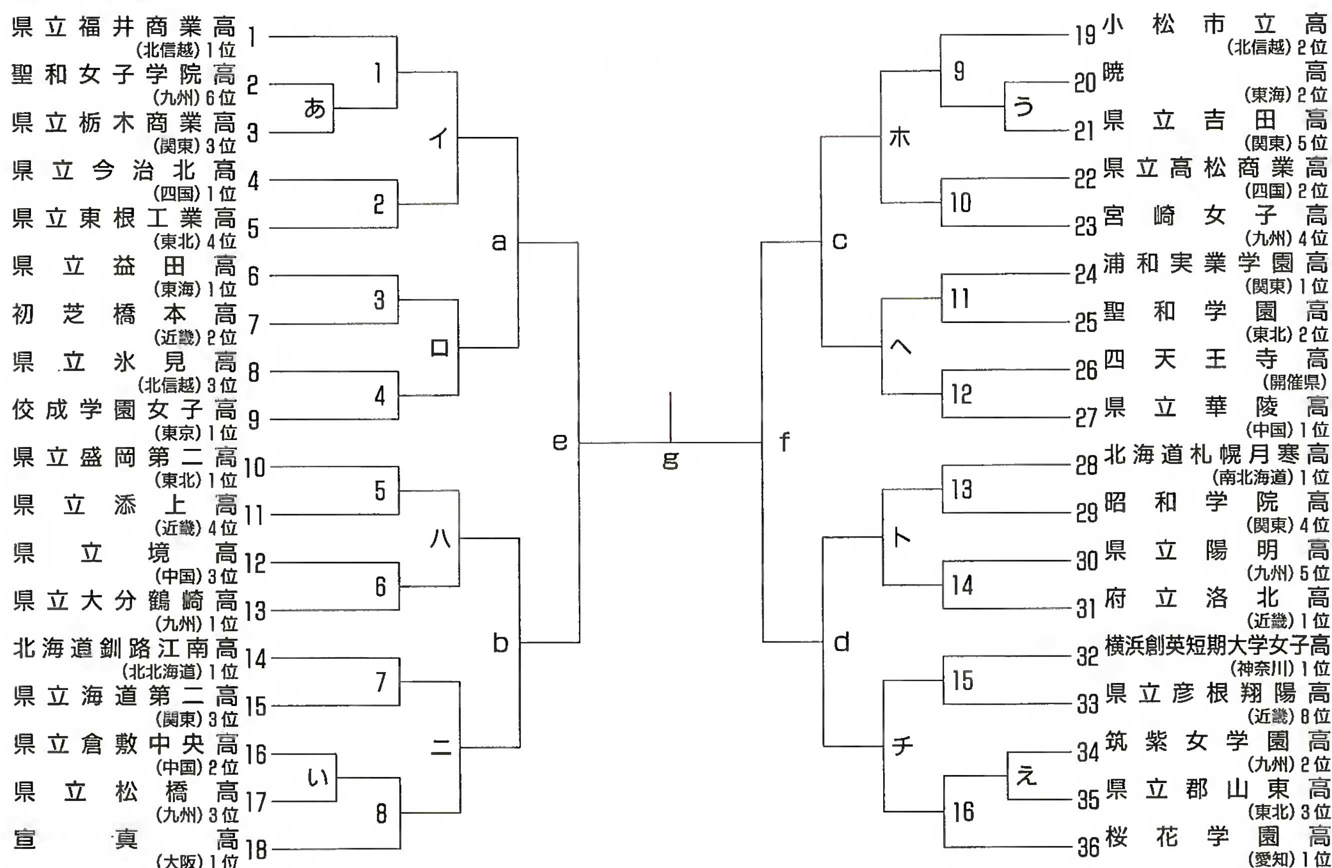
1. 主催　（財）日本ハンドボール協会
2. 共催　全国高等学校体育連盟
3. 後援　文部省　大阪府　大阪市
大阪府教育委員会　大阪市教育委員会
（財）大阪体育協会（財）大阪市体育協会
近畿ハンドボール協会　朝日新聞社
4. 主管　大阪ハンドボール協会　大阪市ハンドボール連盟　全国高等学校体育連盟ハンドボール部　近畿高等学校体育連盟ハンドボール部　大阪高等学校体育連盟ハンドボール部
5. 協賛　（株）アシックス
明星ゴム工業（株）
6. 協力（株）タナベスポーツ　八光自動車工業（株）湧永製薬（株）
7. 期日　平成12年3月24日（金）
～29日（水）（6日間）
8. 会場　大阪市中央体育館
舞洲アリーナ　大阪市立千島体育館
ドームシティースポーツセンター
9. 競技規則　平成11年度日本ハンドボール協会競技規則による
10. 競技方法　トーナメント方式とし3位決定戦は行わない。
11. 参加資格
(1) 選手は、学校教育法第1条に規定する高等学校に在籍する生徒であること。
(2) 各都道府県高等学校体育連盟加盟校の在学生徒であること。
(3) 選手は平成11年4月以降該当学校に在学しており、昭和56年4月2日以降の出生の者で、第3学年生を除く。
(4) 転校後6カ月未満の生徒は参加できない（外国人留学生もこれに準ずる)。ただし一家転住等の理由によりやむを得ない者は、都道府県高等学校体育連盟会長の許可があればこの限りでない。外国人留学生の参加については、大会登録選手の内12名までとし、競技出場も7名中2名までとする。
(5) 同一学年での出場は1回限りとする。
(6) チームを編成する場合、全日制課程の生徒と定時制課程の生徒との混成は認めない。
(7) 出場する選手は、予め健康診断を受け在学する学校長の承認を必要とする。
(8) 平成11年度に（財）日本ハンドボール協会に登録されたチームで下記により各ブロック等から推薦、または予選を経て代表権を得たチームとする。
12. 参加校　全国9ブロック等より下記の選抜男女各36チームとする。
北北海道1 南北海道1 東北4 関東5 東京1 神奈川1 北信越3 東海2 愛知1 近畿4 大阪1 中国3 四国2 九州6 開催地1
13. チーム
1チームの人員は、責任者1名、監督1名、主務1名、選手14名（14名出場可）とする（但し、ベンチ入りに際して役員3名及び選手は、日本ハンドボール協会に登録され、大会申し込み書及びプログラムに記載された者であること。なおかつ、協会登録証を持っていることとする)。
14. 表彰
優勝校には、男女共（財）日本ハンドボール協会より協会杯（持ち回り）全国高等学校体育連盟ハンドボール部より優勝旗（持ち回り）株式会社アシックスからアシックス杯（持ち回り）を授与する。第1位より第3位までの男女チームには、チーム表彰状を授与し、個人にはメダルを授与する。
15. 組み合わせ
（財）日本ハンドボール協会と全国高等学校体育連盟ハンドボール部にて行う。
16. 使用球　（財）日本ハンドボール協会公認球（ミカサ手縫いボール）
17. 監督主将会議
平成12年3月24日（金）午前9時30分
大阪市中央体育館　大会議室
18. 開・閉会式　開会式は、3月24日（金）午前11時30分より大阪市中央体育館にて行う。各チームは全員競技服装で参加する。閉会式は、競技終了後直ちに大阪市中央体育館にて行う。
19. 競技日程
[3月24日]
開会式：大阪市中央体育館
男女1回戦：舞洲アリーナ
[3月25日]
男女2回戦：大阪市中央体育館
舞洲アリーナ　大阪市千島体育館
ドームシティースポーツセンター
[3月26日]
男女3回戦：
大阪市中央体育館　舞洲アリーナ
[3月27日]
男女4回戦：大阪市中央体育館
[3月28日]
男女準決勝：大阪市中央体育館
[3月29日]
男女決勝戦・閉会式：大阪市中央体育館

第23回 全国高校ハンドボール選抜大会組み合せ

●男子の部



●女子の部



医科学委員会報告

第4回スポーツ医学・ハンドボール国際学会に参加して

加藤　公(三重医大)／河野卓也(横須賀共済病院)／蒲生晴明(中部大学)／西山逸成(順天堂大・公衛)

I　はじめに

1999年12月1日（日）から12月6日まで女子世界選手権大会と並行してオスロ（ノルウェー）ウレバール国立サッカー競技場会議室で実施された。16ケ国63名の参加者で日本からは医科学委員会から西山逸成委員長と加藤公スポーツドクターが参加し、演題「ハンドボール選手のスポーツ外傷・傷害と体力とくに下肢筋力の拮抗比」を報告した。次の第5回国際学会は、2001年男子世界選手権大会時にフランスで実施予定となった。

II　学会演題内容の紹介

報告分野は疫学、生理学、女性とスポーツ、動作解析、スポーツ傷害、および栄養等であった。

(1)疫学；①ハンドボール傷害の疫学、②ドイツにおけるハンドボール傷害(男子プロ選手の疫学調査)、③イランハンドボール選手の傷害の疫学と原因

(2)生理学；①運動生理（オーストリー選手のシドニーオリンピックに向けての時差とコンディショニング)、②アルジェリア・ナショナルハンドボール選手の形態学、③クウェートハンドボール選手の仕事率と心拍数の動作解析

(3)女性とスポーツ；①スポーツにおける女性の特性、②女性の3特性（乳房・靭帯損傷、外傷）

(4)動作解析；①女性競技者の負荷運動時の下肢の休息時間の解析、②ビーチハンドボールの動作解析（公式試合中の心拍反応)、③ハンドボール選手の投球スピード、身体形状の大きさと力の強さとの関係

(5)スポーツ傷害；①足関節の不安定性に対する2方向性ペダルを用いた特殊トレーニング方法の研究、②軟骨損傷の新情報、③古い問題の再考ーACL（前十字靭帯損傷原因の現在概念)、④ハンドボール競技におけるACL損傷のメカニズム(ビデオ解析)、⑤ACL欠陥膝でのKT1000の計測に対する全身麻酔の影響、⑥ACL再建・骨付膝蓋腱とハムストリングス4重析を用いた方法の比較、⑦セミプロスポーツ選手における骨折のない関節血腫（その非侵襲的な処置）のプロトコールの研究、⑧生体吸収性のスクリュウを用いたACL再建、⑨ナショナルハンドボール選手のスポーツ傷害の予防対策（スポーツ外傷・傷害と下肢筋力の拮抗比の改善・向上の必要性)。

(6)栄養；①ハンドボール選手の栄養摂取状況、②ノルウェー一流選手の栄養摂取状況と問題点


参加メンバー

III　ハンドボール全日本男子選手のスポーツ外傷・障害(フィットネスとの関係からみた予防対策)
ー日本ハンドボール協会医科学委員報告ー

1．目的

ハンドボール全日本男子選手のメディカルチェックと体力測定の結果を検討し、ハンドボール競技の外傷・障害の実態を明らかにしてその予防対策を考察する。

2．対象と調査方法

1）対象選手は全日本男子選手36名（1995～1999年の5年間延べ62名）を検討した。年齢：20～33歳（平均27.8歳)、身長：171～200cm(平均186.1cm)、体重：73～103kg（平均86.8kg）であり、ポジションはコートプレーヤー32名、ゴールキーパー4名であった。

2）調査方法は、5年間を3期間（①1995年6月～1996年12月、②1997年1月～1998年5月、③1998年6月～1999年10月）に区分し、各期間での体力測定結果（1回）とメディカルチェック結果（毎月）とを比較検討した。

（1）体力測定項目は、背筋力、握力、等速性脚筋力、腕力、垂直跳び、全身反応時間、立位体前屈、最大酸素摂取量、無酸素パワーなどを実施した。

（2）メディカルチェックでは、スポーツ傷害（外傷・障害）を次の5段階の重傷度で評価した。①正常（A）②観察（B－1）③注意（B－2）④精密検査（C－1）⑤治療（C－2）

疾患名の統計上、同一期間内の同一疾患名は何回発症していても1つと数え、その重傷度が重なる場合には最も重い障害を選んだ。

（3）体力測定結果と外傷・障害との関係を統計処理（七検定を用いて解析）し、P＜0.05の水準を統計学的に有意とした。

3．結果と考察

1）メディカルチェックの結果（表1）、スポーツ傷害の発生状況では外傷51件、障害84件で選手1人あたり2.18件の発生頻度であった。外傷・障害がなかった選手は僅か6名（対象選手の17%）に過ぎなかった。外傷では足関節捻挫・手指外傷、障害では腰痛疾患・ジャンパー膝・投球肩障害が多い傾向であった。

重傷度では、B－1が79件（58.5%）で、要治療（C－2）・精密検査（C－1）で16.3%を占めており、C－2は表にみるとおり下肢関節・腰椎に発生が多い。

2）体力測定結果と外傷・障害の発生状況との間には次のように有意な相関関係がみられた。

（1）立位体前屈が高値であるなど外傷・障害の発生件数は少ない（P＜0.05）。また足関節捻挫の発生件数は少ない（P＜0.01）。

（2）膝関節等速性脚筋力（60°／秒）の拮抗比（屈曲／伸膝比（%））が低値ほどハムストリングス障害の発生件数は多い（P＜0.01）。また下肢の外傷・障害発生件数も多い（P＜0.01）。

（3）背筋力指数（背筋力／体重）が小さいほど、腰痛疾患の発生件数は多い（P＜0.01）。

表1　5年間のメディカルチェック結果

スポーツ傷害の発生状況			
外傷	51	足関節捻挫	16
		手指外傷	12
		膝靭帯損傷	8
		膝半月板損傷	8
障害	84	腰痛疾患	22
		ジャンパー膝	15
		投球肩障害	14
小計（135）			

重傷度区分		
B－1	79件	58.5%
B－2	34	25.2%
C－1	15 ＞ 22	16.3%
C－2	7	

C－2：
1．前十字靭帯損傷
2．後十字靭帯損傷
3．足関節捻挫
4．足関節衝突性外骨腫
5．中足骨疲労骨折
6．足根管症候群
7．腰椎椎間板ヘルニア

Ⅳ　考察

1）立位体前屈値が高いほど外傷・障害の発生件数、足関節捻挫の発生件数とも少ない傾向から、立位体前屈は身体の柔軟性の指標と考えられるので、柔軟性の向上がスポーツ障害の予防の示唆と考えられる。

2）膝関節等速性脚筋力の屈曲／伸展比が低値ほど、ハムストリングス（大腿部屈曲筋群）障害や下肢の外傷・障害発生件数が多い傾向がみられた。

この傾向から大腿四頭筋の筋力水準と相対的にハムストリングスの筋力が弱いこととなり、ハムストリングスの肉離れを起こしやすくすることが推測された。

3）下肢の外傷・障害の予防のためには、膝屈曲筋（ハムストリングス）も伸展筋（大腿四頭筋）も同じ水準で強化し、バランスを考慮したトレーニングメニューが必要である。

4）背筋力指数（背筋力／体重）が低値であるほど腰痛疾患が多く発生している傾向から腰痛予防として背筋力の強化が必要である。

特に体力強化の一環として体重増加時（筋肉量が筋力トレーニングによって増加）には背筋力の段階的トレーニングが必要である。

Ⅴ　まとめ

ハンドボール競技のスポーツ傷害を考察した結果、外傷・障害の発生率・重傷度とも比較的高値であった。予防対策としては、身体の柔軟性や筋力のバランス（屈曲／伸展比）のよい筋力の強化向上を実践する必要があろう。さらには自己管理として栄養管理、休養・睡眠および体力づくりを基調としたコンディショニングに努め、傷害予防を意識した身体づくりや健康の維持・向上に取り組むべきである。

連載⑨ 世界の技術・戦術を学ぶ

—World Handball Magazine—

指導委員会

平成11年4月号からの連載は、「世界の技術・戦術を学ぶ」と題して、IHFより発行されるWorld Handball Magazineの中の技術練習として取り上げられている部分を、指導委員会を中心に多くの情報担当者の協力を得て訳していただき、それを構成して多くのハンドボール関係者の皆様へ情報を提供しようとするものであります。

今月号は、昨年行われましたジュニアの世界選手権大会（女子：中国、男子：カタール）における技術分析を翻訳掲載いたします。今回の分析においては男女ともジュニアにおける戦術がシニアチームの戦術に近づいていることを指摘しています。これは単に技術にとどまらず、体格、体力、持久力等の総合身体機能トレーニングにも影響がでてくるでしょう。

翻訳は時期女子ジュニア監督に内定しております田中俊行氏（ブラザー工業監督）、岡本大氏（国際武道大学大学院）にお願いしました。

この連載の中におけるポジションの表記に関しましては、基本的に参考図を示すドイツ語表記を利用いたします。

（指導委員会　笹 倉 清 則）

翻訳　女子ジュニア監督　田中俊行（ブラザー工業監督）
指導委員会情報担当　岡本　大（国際武道大学大学院）

第12回女子ジュニア世界選手権（中国）の分析

全体の分析

①22チームが参加。カザフスタンとサモアは不参加。

②この世界選手権での重要な７つのポイント

—試合の戦術がシニアのものと酷似している。

—オフェンスにおいて、１対１を使うプレーが顕著である。

—韓国、ロシア、デンマークを除いては、ほとんど速攻がない。

—シュート成功率の高さ。可変性に富んでいる。

—同じチームによる異なったディフェンスシステムが採用されており、その使用目的が明確にされている。

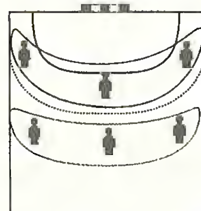
—ゴールキーパーのシュートセービング率が低下してきている（シュート確率の上昇）。

—身体的、形態的に優れている。したがって、オフェンス、ディフェンスの両面において、より力強いプレーを可能にする。

1. オフェンス

先のブラジルでの世界女子ジュニア選手権（1998）で、

3−3オフェンス



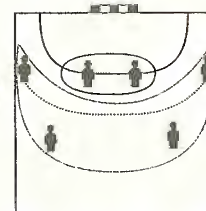
ゴール近くに3人
ゴール遠くに3人

1−5オフェンス



ゴール近くに1人
ゴール遠くに5人

2−4オフェンス



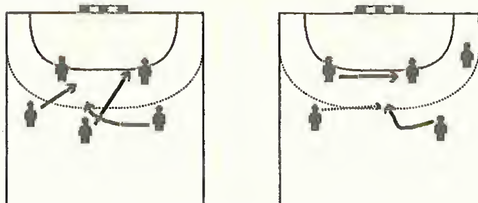
ゴール近くに2人
ゴール遠くに4人

コートジボアールと中国は、戦術面でジュニアチームがシニアチームと急速に似てきていることが指摘されていた。

1．1　使用された戦術

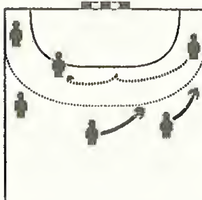
ジュニア世界選手権で使われた戦術は、シニアの大会で

フローターと切っていった選手（特にセンター）によるクロス
またはポジションの移動



サイドプレイヤーから始まる6mライン
付近でのプレイ

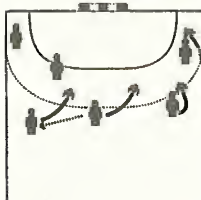


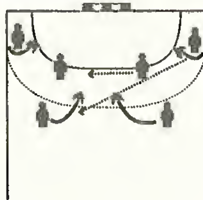


ずらしのプレー



ずらしのプレーとバックパス





使われるものと同じではあるけれど、個々の選手の活動に関しては技術的に完成はされていない。デンマークとルーマニアを除くチームは、ボールのないところでの戦術的プレイに乏しい（特定のきっかけの動くのあるケースを省く）。

一般に試合は以下の３つにより特徴づけられる。

—大変速い攻撃

—大変速い攻撃集結（シュートへ導くパスがないか、より速いシュート）

—１対１を作り出す組織プレイ、ますます厳しいマークにあっているポストプレイヤーの必要に役立つ。

1．2　1対1のプレイ

このタイプのプレイはしばしば戦術とは関係なく、攻撃の大変早い段階で起こる。これは以下の結果につながる。

—他のプレイヤーとの頻繁な衝突

—ボールを失う可能性の増大

１対１において最も頻繁に使われた形

—１対１からシュート（ジャンプシュート）

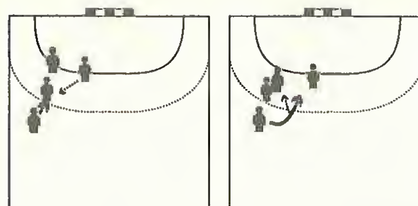
—１対１からカットイン（インサイド、アウトサイド）

—１対１からポストプレイヤーにパス

もし１対１のプレイが有効でなかったら、一般的にポストがプレイをサポートする必要性が大きくなる（リトアニア、ユーゴスラビア、デンマーク、スペイン、ルーマニア、ハンガリー）。

1．3　ポストプレイ

このタイプのプレイはしばしばフローターやサイドによ



る戦術とは関係なく行われる。ポストプレイはポストのプレイヤーが相手マークを外さずフリーでなくても行われた。

これは多くのパスミス、キャッチミス等のボールロスとフリースロー(攻撃者がボールを自由にできなかったとき)を意味する。

また、ポストプレイヤーはほとんどバウンドパスを受けていないことにも注目すべきだ（ポストプレイヤーの身長のせいか？)。これの場合も多くのボールを失う可能性のあることを意味する。

1．4　数的優位でのプレイ（退場時）

数的優位において戦術的プレイはほとんどしない。しかしながら数的に優位なチームが、この有利な状態を活用できず、得点をされるといったこともしばしばである。

2．速攻

速攻（１次）はほとんど使われなかった。ハンガリー、デンマーク、韓国のみがこの戦術を使用した。オフェンス陣の戦術的組織はほとんどない。２次、３次速攻によるフォローもほとんどない(ロシアを除いては)。速攻とセットプレイの間に継続性はなく、戦術的コンビネーションプレイもない。韓国だけが速攻でシュートまでいけなかったとしても、ポストプレイヤーを使う戦術を展開している。

3．シュート

以前の世界選手権（コートジボアール、ブラジル）と比較してシュートは、その種類と射程距離を主に最も向上が明確に見られた分野である。

—ジャンプシュート

—ランニングシュート

—サイドハンドでのジャンプシュート

—サイドハンドでのステップシュート

—ステップシュート

—スピンシュート（サイド）

また最高シュート成功率も調査した。：フローターは65％以上、サイドは55％以上の成功率に達した。

しかしながら、ポストプレイヤーのシュート成功率はフローターやサイドプレイヤーより低かった。この原因は以下の様に考えられる。

—ジャンプ後大変すばやくシュートしなければならず、シュートが難しい。

—シュートのための助走を、十分にとれない（すばやくシュートするため)。

対照的にポストとディフェンスの１対１の場面において、ポストの戦術的プレイはますます精巧なものになってきており、シニアのプレイに近づいてきている。

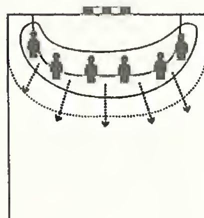
―ポジションの変化（移動、移行ポスト）

―防御の裏のスペースへ走り込むプレイなど

シュートに至るまでの過程でポストプレイヤーの果たす役割はますます重要に成るであろう。

4. ディフェンス

4．1



相手の攻撃の変化に関わらず、試合の方針以上の戦術の変化はなく、一般に１つのシステム（６―０）が使用された（マンツーマンの場合を除いて、５―０＋１）。デンマーク、ノルウェー、ハンガリーだけが６―０から５―１または２―４といったディフェンスシステムに変化した。

4．2

シニアと同様にディフェンスはゴールを守ることを目的とし、それぞれのプレイヤーの活動量はそれほど重要ではない(デンマークとノルウェーを除く)。中国だけが３―３ディフェンスやマンツーマンを行った。

4．3

６―０ディフェンスの基本的な防御に対して、多くのチームの攻撃は消極的なものとなった。この防御の欠点は、成功の可能性のある１：１のプレイの実施を妨げることである。この防御の場合、先に述べたボールロス攻撃側のチャージを誘発することができる。

4．4

最後に、これらの世界選手権ではオフェンス面よりディフェンス面の指導の重要性が低かったということが示されたように思われる。ジュニア世界選手権の指導では、前にでるタイプを含め、少なくとも２種類のディフェンスシステムが必要である。

5. ゴールキーパー

シュート阻止率は低い。キーピング能力は阻止率と関連性が薄く、特にサイドシュートにおいては、ほぼすべてのキーパーがシュートの間に前方へ移動した。ディフェンスとの戦術的連携は不足している。一般的には、肩より上のシュートに対してはキーパーの阻止率は高い。

結　論

この世界選手権では、ジュニアのプレイがオフェンス、ディフェンスの両面においてシニアのプレイを目指して向上していることが観察された。

―しばしば一線ディフェンスに対しては不適切な１対１のプレイを行う絶え間ない努力

―ほとんどすべてのチームが６―０ディフェンスとマンツーマンを使用

―速攻の不足

―ゴールキーパーのセービング能力が低い

しかしながら身体的、形態的な質の向上が、力強く、効果的なプレイを可能にした。フローターは一般にパワーがあり、身長の低いものはいなかった。

戦う姿勢と精神は重要性を増し、それが過酷な戦いの結果を左右する。強いナショナルチームとの差は徐々に縮まってきている。それ故、前もって試合結果を予測することは益々困難になってきている。フィジカルな面で最もよくトレーニングされたチームは、試合の最終局面まで力強さを維持する能力を発揮するであろう。

また、世界中の異なる学校環境によるハンドボールに対する影響の差も明らかに異なってきている。

―イースタン・スクール：ロシア／ユーゴスラビア

―スカンジナビアン・スクール：デンマーク／ノルウェー

―アジアン・スクール：日本、韓国、中国

―ラテン・スクール：トルコ、スペイン

すべてのポジションで最も効果的で最高の組織を持ち、世界選手権で大変強いチームをつくったルーマニアが1999世界選手権では優れていた。

ＩＨＦの放送チームによるビデオでもこの分析のイメージをつかめるだろう。これらのビデオはバーゼルのＩＨＦ事務局において販売されている。

第12回男子ジュニア世界選手権（カタール）の分析

17カ国が参加し、クウェート、サウジアラビア、アンゴラ、コートジボアール、アルゼンチンは不参加。ポルトガルが代わりに参加した。

1. 重要なポイント

1．1　ディフェンス

３つのシステムが使われた。

６―０：決勝に進出したデンマーク、スウェーデンが使用。

５―１：１人のディフェンスプレイヤーが真ん中もしくは右か左の前方に位置する（スペイン）。

１―５：プレスディフェンス。活動範囲はコート半分全部。エジプト、チュニジア、カタール、フランス、ギリシャ、ブラジルが使用。

1．2　プレイヤー

全体的に体格は大きくなり、将来が楽しみである。サイドプレイヤーからゴールキーパーまで、すべてのポジションにおいて優秀なスペシャリストが数多く見られた。

1．3　速攻

速攻はサイドプレイヤーにより開始された。

3、4人のプレイヤーによる2次速攻（スウェーデン、ロシア)。

いくつかのチームは速攻を行わず、より確実なセットオフェンスによる試合を展開しようとした。

1．4　プレイの速さ

しばしばプレイのスピードが速すぎ、多くのミスにつながった（パスミス、オーバーステップ、オフェンスファウル)。

1．5　シュート

フローターのフリースローからの高いシュート成功率が向上した。

より身長の高い選手によるジャンプシュートによる得点が多く見られた。

1．6　オフェンス

ディフェンスのマークの弱い1対1は、ゴールもしくはポストプレイにつながった。

フローターとサイドの5人は共同してチームの戦術的プレイのため、常に動いていて、きっかけを作り、シュートまで結びつける役割を果たしている。

1．7　感情的側面

精神的に弱いチームは攻撃的、積極的なディフェンスやコンパクトで密集しているディフェンスをされることにより攻めることができなくなり、得点まで結びつかない場面が見られた。

1．8　プレイのタイプ

いくつかの異なるハンドボール・スタイルが観察された。

—スカンジナビアン・スクール：強く正確

—ラテン・スクール：熱心で技術的に高度

—ロシアン・スクール：組織的で技術もある

—アフリカン・スクール：速く攻撃的（壮大で華々しい）

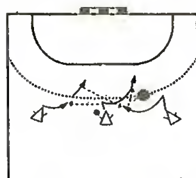
2. オフェンスの戦略

3—3もしくは5—1オフェンスをベースにプレイし、特定のきっかけからダブルポストへの移行もある。

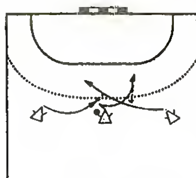
—フローターのローテーション。センターと左45° もしくはセンターと右45° のクロス

—フローターとサイドのクロス

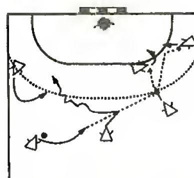
センターと右45° クロス



センターと右45° と左45° のクロス

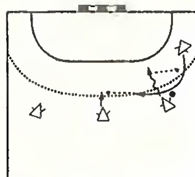


スペインの攻撃パターン

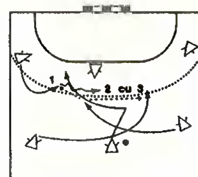


左45° と右45° のクロス。プレイ継続：センターは6mラインに走り込む、さもなくばゴールエリアにパスをする。

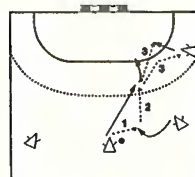
サイドと右45° クロスの基本パターン



スペイン—フランス戦における攻撃パターン センタープレーヤーがダブルポストに入る

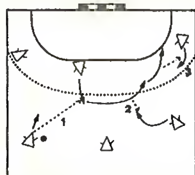


スワーデンのセンターからサイドへの攻撃パターン センターがポストに入る

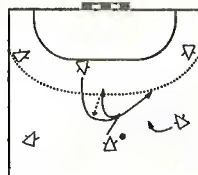


センタープレイヤーがポストの位置に走り込むパターン。

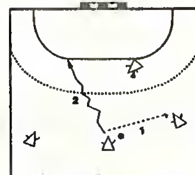
左45° からのきっかけでポストが移動する



センタープレーヤーがダブルポストに入る

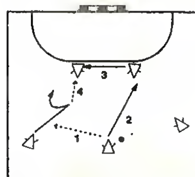


センターがポストに入る

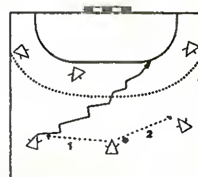


フローターの特定の走り込み：ボール側／ボールの逆側／ポストのいる側／ポストのいる側の逆側。

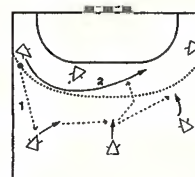
センターがポストプレイヤーのいる側へ走り込む



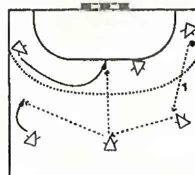
右45° のプレイヤーがポストのいる側もしくは逆側へ走り込む



右45° のプレイヤーがポスト側もしくは逆側に走り込む



ボールのない側のサイドが走り込み、バランスを取る様にフローターが移動する



攻撃のための準備に使われたパス：ずらしのためのプレイもしくはポストへのパスを狙っての長く、速く、正確なパスによってシュートに結びつくケースがよく見られた。

—ほとんどバウンドパスは使われず、空間を通ったパス。

—サイドへの大変すばやいショルダーパス（しばしばバウンドパス)。

3. 速　攻

3．1

ゴールキーパーから1次速攻のプレイヤーへのロングパス。サイドプレイヤーがよく使われる。

3．2

2次速攻では、スピードにのったドリブルを使用：プレイヤーは直接シュートするかシュートする者へパスをする。2、3人のプレイヤーがリターンパスを用いて、迅速に前方へ移動する。2つのチーム（スウェーデンとロシア）は組織された2次速攻を行った。すべてのプレイヤーはショートパス、リターンパスを使い、選手間のスペースを維持しながらボールを前方へ進めた。

4. ゴールキーパー

すべてのチームが優秀なゴールキーパーを出場させた。

キーパーは体が大きいか身長が高いか、または動きがすばやいか技術があるものであった。

ゴールキーパーには次の2つのスタイルが見られた。

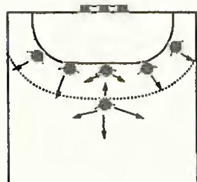
—ゴールキーパーは6mラインからの近距離シュートに強いか、遠距離シュート（9m）に強いかであった。

—ゴールキーパーはより高く、前方に移動し、シュート角度をなくしていた。大変優秀なキーパーは、6mラインからのシュートや7mシュートを止めるといった能力を発揮した。

すべてのゴールキーパーは速攻を意識しており、幾人かは実際速攻の起点になっていた。

5. ディフェンスの戦術

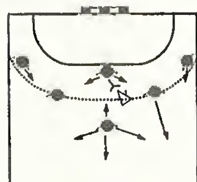
5. 1　前にでるタイプのディフェンス



—5—1ディフェンスをベースにし、そこから発展するディフェンス。トップのディフェンダーはゴール正面を守るか、または9mラインに沿って移動し、左右45度のプレイヤーの攻撃を妨げる。

—5—1ディフェンスをベースにしているが、そこからすばやく4—2や3—3ディフェンスに変化する。

5. 2　トップのディフェンダーが限界まで高く位置し、攻撃的な1—5ディフェンス



他のプレイヤーが攻撃的なディフェンスをしている間、センターバックは中心を守る。

—攻撃陣やボールを押し出すゾーンディフェンス。

—相手のチームプレイを個人的に撃破する。これは、ハーフコート全体のマンツーマンディフェンスや連合したディフェンス（いくつかのチームのケース）になる傾向がある。

5. 3　6—0ディフェンス（デンマーク、スウェーデン）



—6—0ディフェンスは高い身長を利用し、相手をコントロールできる。攻撃陣に余地を与え、自由にさせておくのがこのディフェンスの仕組みである。

5. 4　個人技術

攻撃陣が走ったり、ジャンプしたりすると、ディフェンスにコンビネーションミスが生じたり、1対1に関しては弱さがあった。

敵の裏をとろうとする目的のもと、接触プレイをしてくる攻撃プレイヤーのために、ディフェンスすることは大変困難であった。6mラインに沿ってディフェンスすることだけがこの問題を解決でき、相手の体や腕をつかんだりすることなしに防御することはほとんど困難である。

繰り返されたミス：両腕を使ったプッシングは警告、退場になりやすい。何人かのディフェンダーは攻撃の方へ前進したはいいが、ディフェンス組織を再び組み立てるためにどのように戻ればいいかわからず、結果これが多くの2分間退場に繋がってしまった。

6. シュート

○優秀なサイドのスペシャリスト。時々スピンさせてバウンドさせる。特にシュートの角度をひろげるため、またループシュートや近めの上を狙うため、勢いをつけて飛び込む。

○フローター

—フリースローラインからのジャンプシュートに加え、2人または背の高いディフェンダーの間からシュート（大変すばやく）する傾向も見られた。ディフェンダーの陰に隠れるようなシュートが見られた（キーパーから見えなくする）。また、逆足ジャンプでのシュートもあった。

—1対1の後バランスを維持するため、低いジャンプでのシュートが見られた。

○速攻からのシュート

—ほとんどの場合クイックシュートであった。

—追ってくるディフェンスのプレッシャーの中で走りシュートするためボールはほとんどコントロールできない。

—リリース時の変化がほとんどないので、キーパーとは正面での駆け引きとなっている。

○7mスロー

優秀なキーパーは、しばしばシューターを圧倒し、シュートミスを誘っていた。6割の阻止をしたゴールキーパーもいた。

○ポストシュート

このポジションで目立った選手は、7mシュートを量産した。これがプレイヤーの意図かどうかはわからない。

結　論

大多数のチームが真剣にチーム力向上の場として、この世界選手権を活用していた。これは選手もそうだし、コーチもあてはまる。共同作業が技術、戦術の両面において有益なものであったといえるだろう。プレイはシニアチームの選手のものと似通ったりもするが、プレイヤーの感情や時には戦術的な熟練度が彼らが21歳以下であることを思い出させる。

リスクのあるプレイ(特にディフェンス)が試合中、もしくは次の試合へのプレイをかなり不安定にしていた。大量のエネルギーと交代要員を使いながらプレイするチームは、ディフェンスにおいて経験不足があり、2分間退場やあるいは失格といった処分と同様に攻撃においても失速した。

女子と同様に、男子においても各大陸や各国におけるハンドボールに対する考え方や取り組み方の違いがハンドボールゲームの展開や戦術に現れてきている。

協会だより

1月度常務理事会

日　時 1月9日（日）9：30〜13：00
場　所　東京体育館第3研修室
出席者　中澤副会長、市原専務理事、常務理事8名、理事1名、事務局2名

【議題】

1. 平成12年度事業計画および予算編成について

標記の件につき、12月常務理事会より引き続き検討。

小学校教科体育にハンドボールが加えられたことを機に、普及委員会を始め各部署によりプロジェクトチームを作り推進していくことの意見があった。

予算について、審判中央講習会予算を大崎財団の助成金をあて、大崎財団の趣旨に沿い社会人の大会の審判のレベルアップを図ることとし、日本リーグ機構により申請することとした。12月審議済み事項を含め承認した。

2. 「がんばれハンドボール10万人会」について

次年度に向け、推進委員に活動方法のマニュアルを作り募集活動を推進する活動計画の報告。

10万人会の発足初年度の活動実績報告を日本リーグプレイオフの記者会見で行う。

2月27日開催の事務取り扱い責任者会議で詳細報告をする。

10万人会入会に際し、現行のシステムでは対応が遅れるため、改善する。

3. シドニーオリンピックアジア予選について

選手団、役員、レフェリーの日本到着、出発の送迎分担を決めた。

渉外について役割分担を決めた。

その他、広報、集金、支払いについて担当を決めた。

競技会場の出店について、日本協会グッズ販売を含め、出店を了承した。

4. オーナー会議・叙勲お祝いの会について

米倉会長の勲一等瑞宝章受賞のお祝い会とオーナー会議の次第について決定。

オーナー会議について、日本協会の現状、日本リーグ関連、強化事業関連について報告する。

5. その他

松原光三氏（大同特殊鋼）を参事に委嘱することを承認。

【報告了承事項】

1. '99ミズノスポーツメントール賞候補について

選手、監督としてオリンピックに3度出場、また優秀な選手を輩出した実績と、今日企業スポーツの振興に活躍されていることから、竹野奉昭氏を推薦することを了承。

2. 日本スポーツ賞

日本スポーツ賞に日本協会より推薦した筑波大学女子ハンドボールチームの受賞が決定したことを報告。

3. 平成12年度事業日程について

常務理事会、理事会、評議員会、事務取り扱い責任者会議等の日程を了承。

4. 競技運営に関する連絡協議会報告

「がんばれハンドボール10万人会」の現況について

「がんばれハンドボール10万人会」は、10万人という数字について解釈がまちまちとなって伝えられ、混乱がありました。このたび、この考え方についてまとめがなされ、若干の言葉の整理がなされましたので、10万人会現況とあわせて報告いたします。

まず、10万人会の捉え方ですが、これは従来より説明がなされていますスポーツ競技のメジャー化を判断される目途の数字が10万人であるとのことから、総登録人口を10万人以上に持っていこうとの発想より設定がなされました。

この10万人という数字は、以前から述べられているように、メジャー化の目途であること、これによりマスコミへのアピール度があがること、スポンサーの支援対象としての位置付けがあがることなどのメリットがあります。

今回、競技者、監督・コーチなどの指導者、運営役員、レフェリーなど全てのカテゴリーを含んだ総登録自体を「がんばれハンドボール10万人会」と称し、日本ハンドボール協会の総登録を、10万人以上を目標に活動するとの考え方にまとめられました。今までいろいろと議論のありました、支援会員は「サポート会員」という名称で区分されることとなりました。この制度の議論の始まりましたころの登録人口が約8万人だったため、このサポート会員は、当初2万人を目標に計画が練られました。

日本協会登録人口は、少子化の影響もあり減少傾向にあり、平成10年度には76,069人（機関誌393号）となっています。平成11年度より始められました新登録制度は、皆様のご協力により、表のように平成12年1月31日現在85,650人となっており外部に対するアピール度は上がっております。このことは3月にマスコミ発表することで準備が進められています。

日本協会が目指します総登録人口10万人に、あと14,450人です。どうか皆様も目標の10万人に向かって新たなサポート会員の勧誘にご協力下さいますようお願い申し上げます。

平成11年度がんばれハンドボール10万人会登録人口

（財）日本ハンドボール協会
平成12年1月31日現在

種　別	平成10年度登録人数	平成11年度登録人数
サポート会員		524
日本協会役員		83
都道府県運営役員		2,043
公認審判員		985
公認指導者		204
チーム役員		7,870
一般　L	515	423
一般　A	6,575	6,182
リージョナル	3,921	3,144
学生	4,551	4,484
高専	594	661
高校	38,042	35,528
中学校	20,154	21,286
小学校	1,717	2,233
合計	76,069	85,650

平成11年度から
新会員登録制度
スタート！

がんばれ ハンドボール 10万人会



●HANDBALL FAMILY

	年会費	主な特典
グランド会員	10.000円	日本協会機関誌（年11回） 日本協会主催大会無料パス 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引
ファミリー会員	3.000円	日本協会主催大会無料 ペア券1枚 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引

■登録増によるメリット

- メジャースポーツとして認知
- 登録金の増収

↓

- スポンサーがつく
- 全員参加意識の高揚

↓

財源確保

↓

各種事業への活用と充実
- ○小・中学校の普及
- ○ビーチ・マスターズ・車いすハンドの支援
- ○ミニハンドボール競技の導入
- ○ジュニア層の重点強化
- ○各大会の補助金アップ
- ○国際大会の招致
- ○一貫指導体制の確立

団結しよう！
ハンドボール・ファミリー

少子化の影響などにより登録人口の減少傾向が各スポーツ界の大きな悩みになっています。昨今の経済不況も深刻さを増すばかりです。

今こそハンドボール・ファミリーが団結する時です。皆さんが自分のチームを愛するように、日本ハンドボールを愛して下さい。登録人口が増え、財源が大きくなれば、小・中学校の普及はもとより、ビーチ・マスターズ・車椅子ハンドボールの支援、ミニハンドボールの普及、また強化の根幹となるジュニア層の重点強化、そして各大会の補助金アップや国際大会の招致などにつながります。

皆さん1人ひとりが主役です。選手、審判、役員、OB、OGなどに限らず新たなサポーターも募り、全員参加のもとでメジャー化を図り、ハンドボール文化を構築しましょう。

グランド会員、ファミリー会員への入会方法

所定の申し込み用紙に必要事項をご記入の上、お申し込み下さい（郵送の場合は切手は必要ありません）。後日、日本ハンドボール協会から会員バッジなどをお送りします。年会費はご指定を受けた金融機関の口座から引き落としさせていただきます（ほとんどすべての金融機関でご利用できます）。

なお、申し込み用紙は、日本協会、各都道府県協会、または各全国連盟事務局にご請求下さい。

財団法人　日本ハンドボール協会

〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1　岸記念体育館内
TEL.03-3481-2361　FAX.03-3481-2367
http://www.handball.or.jp/

ANA CUP　第24回日本ハンドボールリーグプレーオフ 並びに１部男子入替戦のご案内

これがハンドボールだ！　今では、伝説となりつつある「死闘」が、三度繰り返されるか？　ハンドボール・ファンの期待を集め、今年も「駒沢体育館」を興奮の渦に巻き込むことでしょう。テレビも決勝戦は生中継となりました。常に新しい話題を提供し続ける「日本リーグ・プレーオフ」は、今回もはち切れそうな「夢と感動」をいっぱい詰め込んで、多くの皆様のご観戦をお待ち申し上げております。

大会名：ANA　CUP
第24回日本ハンドボールリーグプレーオフ
（並びに１部男子入替戦）

主　　催：(財)日本ハンドボール協会・日本ハンドボールリーグ機構

主　　管：日本ハンドボールリーグ運営委員会
第24回日本リーグプレーオフ実行委員会

特別協賛：ANA（全日空）

期間：平成12年３月18日(土)～３月20日(祝)・３日間

日程：

第１日　３月18日(土)
15：00　男子入替戦第１日（１部８位×２部１位）
17：00　男子入替戦第１日（１部７位×２部２位）

第２日　３月19日(日)
11：00　男子入替戦第２日（１部７位×２部２位）
13：00　男子入替戦第２日（１部８位×２部１位）

15：00　プレーオフ・女子準決勝（北国銀行×OSAKI OSOL） 17：00　プレーオフ・男子準決勝（２位×３位）	ＴＶＫ放映（録画）18：30～21：45

第３日　３月20日(祝)

13：00　プレーオフ・女子決勝（イズミ×準決勝勝者） 15：00　プレーオフ・男子決勝（１位×準決勝勝者）	ＴＶＫ放映（生中継）13：00～17：00

開催場所：東京・駒沢体育館（タラフレックス使用）

出場チーム：
【プレーオフ】公式リーグ戦・男女上位各３チーム
（女子は、上記の組み合わせ通り１～３位決定）
【入替戦】男子１部下位２チーム、２部上位２チーム
ＴＶ中継：男女；準決勝、決勝、計４試合、ＴＶＫテレビによる放映

入場料

【前売券】	全席自由席	一般・大学生 中　高　生 一　般　ペ　ア 中高生(５名)	1,700円 800円 3,000円 3,000円
【当日券】	全席自由席	一般・大学生 中　高　生	2,000円 1,000円

＊小学生以下は無料
＊３月18日（土）入替戦は、当日券のみ下記の通りといたします。
一般・大学生；1,000円　中高生；500円
＊前売入場券は「チケットぴあ」で２月20日より販売開始予定。

お問い合わせ：日本ハンドボール運営委員会
（☎03－3481－2361）

●3月の行事予定

★第23回全国高校選抜大会
３月24日～28日：大阪市中央体育館ほか
★日本リーグ
３月４日～11日：各地
★日本リーグプレイオフ（上掲）
★常務理事会　３月20日
★平成11年度コーチ・レフェリーシンポジウム
３月10日～12日：東京・代々木オリンピック記念青少年総合センター

HAND BALL CONTENTS MAR

柔らかな感触で、最適なバウンド！



PKCH3-AD DX
5,500円

新発売



PKCH2-AD DX
5,400円



PKCH1-ADJ
3,600円

アデランテ　前進

手縫い・国際公認球





PKCH3-AD
4,600円





PKCH2-AD
4,500円



PKCH3-ADR
2,800円



PKCH2-ADR
2,700円

MIKASA®
明星ゴム工業株式会社

(財)日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第四〇五号

昭和四十年六月七日
第三種郵便物認可

平成十二年二月二十六日印刷
平成十二年三月一日発行

東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三

編集兼
発行人 市原則之

価格は登録金に含む